THE Y.W.C.A. MONTHLY

女子青年界

八月號

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可
大正十年八月一日發行（毎月一回一日發行）

女子青年界第十八卷八月號

Y.W.C.A

要目

日本基督教女子青年會發行

消化と
毒けし



金言　健康が生んだ子寶國寶
（仁丹保健標語）

朝夕仁丹の一粒は
弱り易き夏の人體に

靈感

強き
インスピレーション

を與へ科學的に胃腸の運動を促進します

皆樣考へるより先づ御實行の
一粒をお奬めします

第十八卷第八號

女子青年界目次

大正十年八月號

女子青年界 第十八卷 第八號 大正十年八月一日發行

會説

憩の水濱

河井道子

本年の女子青年會夏期修養會は富士山を眞正面の掛物に飾つた御殿場東山莊と云ふので景色、氣候に申分がありません。たゞ殘念の事は申込數の多いに比して收容積の小隘なことであります。其故に折角十人もと申込まるゝに、五人丈しか場所がないなどゝ御斷りするは、其責任者にとりては非常な苦痛でした。これを思惟ふにつけても本會は永年宿題になつてゐる修養會地所を、一日も早く購求める必要がヒシ／＼と切迫してゐます。本部の者共は數年間知人友人に候補地の紹介を乞ひ、房州邊、熱海方面、國府津附近葉山邊を、或時は專問家に、或時は中央委員や幹事等が視察調査に出掛けましたが、帶に短し襷に長しで、及びもつかぬ高價であつたり、通行不便であつたり、もしくは水の缺乏、氣候不良などゝ意外な故障が起つて來ます。しかし此土地を得んが爲め學校や社會の若き諸姉妹がどの位今日迄骨折り、祈り、金策の道を講じて協力されつゝあるを思ふと當局者一同は氣を揉み思ひを碎き、恥しい事だが幾千坪幾萬坪の所有者を恨めしく思ふた事も屢々であります。

米國女子青年會の姉妹方は自國には十數ヶ所も山に海に、溪谷に、湖畔に修養會を開き得、太平洋沿岸アシロヌーには四萬坪以上の土地さへ此目的のため他より寄附され、春夏秋冬、各團體の修養會に開放されてある等に比して、我國には女子青年會といはず一般婦女子團體が修養、保養の集會に適當の場所、設備が一ヶ所もなきに彼等は同情して、一日も早く我等の歡喜を充しめんとて約二萬圓に近き寄附がありました。此金は米國の諸所に開催せる夏期修養會出席者よりの特別寄附であることを諸姉に報知したい。其中には女中も學生も、女工も、事務員もあることを記憶してゐて下さい。日本で此目的の爲に集まつた金額はまだ一千圓に充たないが、必らず幾萬と云ふ額が近きうちに與へられると信じ祈りつゝ努力に勇氣を加へて成功せしめねばと存じます。

一體此がための土地を建物に幾何の費用が入るかと申せば少なくも十萬圓なくては手のつけやうがありません。數ヶ年も此事を喋りながらまだ一千圓も出來ないのは心細いのですが、つまり私共の熱心と努力とがすくないのと、祈の力の乏しかつたことを告白します。

詩篇の二十三篇にある通り私共は神の羊でエホバは牧者です、青緑の野邊やいこひの水濱に導き給ふ事が必要ならば與へて下さるに相違がありません。實際黄塵萬丈の都會に屈居するものが凉影滿地の清風に膚を洗ふ事や、敎室にて蟹文鳥字に腦力、視力を失ひつゝあるものに青雲紫峰を仰がしめる事や、若き時代より生活難と處世難の戰に倦み疲れたるものを自然界の調和と美妙で犒ふなどは是れ皆神が羊を憩の水際に導き給ふとの意味の一部であると思ひます。かくは申せど我等の修養會場は身體の保養をのみ計る避暑寒地では元よりありません。何處までも本會が主眼とせる靈智體交の四方面の發達を目的とし、パウロの所謂寢るにも食ふにも神の榮を顯はし得る樣な別天地を作り、費用少くして益多く、染なく汚なき樂みが自然に湧出で

る場所として青年女子に開放したいのが私共年來の切願であります。かくせば母子、師弟、主婢共に相提へて夏を送り冬を過ごす事も出來る家庭園になります。また身體や精神に靜養の必要ある人々には此處が衞生園にもなります。神に近づき、自然を識り、古人に親しみ人々と交はる、塵思埃念禁制の樂園となりましよう。換言すればよき意味に於いて、神が各自に與へ給ひし生を充分に樂しみ、特に若き女子にのび〳〵とした生を持たせ得る力の發電所にしたいとの宿願であります。東京市は岩崎男爵の寄附された百萬圓で市中に食堂を建て娛樂場を數ヶ所に設くると新聞紙上にありますが何とも得いはれぬ一種の羨望がむら〳〵と湧いて來ます。毎年〳〵修養會を何處にしようと按じたり、夏中都會に苦悶して居る姉妹方が何處か二三日行き度いと訴へらるゝにつれ、海濱、山陰にガラ空になつて居る別莊等が勿體なくなります。時ならずも病氣で倒れたとか、誘惑に陷いつたとか、娛樂の欲さに低級な活動、音樂、小說に耽けつて得々たる若き女子を知ると、アヽ彼等をして清絕妙媚の地に數日でもあらしめたらば此境遇に陷らざらしめしことゝ幾度か私共は悲しんだ事でせう。然し私共には土地や建物を得るには信仰と努力とが從來充分でなかつたのでまだ與へられないのです。

「地と其に充るものの世界と其中にすむものとは皆神のもの也」（詩篇廿四）

「地の深き處、みな神の手にあり、山の頂上も亦神のもの也、海は神の造り給ふところ旱ける地も亦其手にて造り給へり、我等は其草苑の民其羊也」（詩篇九十五）

然うです地は神のもの、我等も神のもの地上の富も凡て神のものです、土地所有者は神の借家人の樣なものです。女子青年會にも神のよしと思召す時に、借家權を賜はるは必然です、其を實現せしむるために働け工夫せよ、勇氣を出せと獎勵し給ふのであります。皆さん尙御奮發して御助力下さいまし。

抑も地上に於ては誰が自然界の所有者でせう。山水明媚なりとて別荘や旅館で藝者と戯れたり、飮食に耽つたり低級な娯樂に親むものは山水に對して不敬者です。富士の裾野に幾十萬坪を有ち四方に鐵柵を廻らしたとて、かの絶景を誰が專有出來ませう。

阿房宮の上には萬人を坐せしむべく下には五丈の旗を建つべしと誇つた秦の始皇帝だとて日の出、日の入の雄大さをいかで私有出來ませう。よく〳〵考へてみるに神樣は自然界をば誰にでも淸く尊く樂むことの出來る詩人、書家、小供、憧憬者には無差別に賜はつたものであります。眞に神の創造を驚賛するものが自然界の所有者でありませう。

「エホバの山に登るべきものは誰ぞ、其聖所にたつべきものはたれぞ、手きよく心潔き者の魂虚きことを仰ぎのぞまず僞の誓をせざるものぞ其人なる」

かゝる山登を我等は出來ましようか、富士登山には六根淸淨を誦へますが、神の山へのぼるは其實行がなくては頂上には達せられません。

諸姉にして自然界を讀んだ宗敎の詩を知り度くば詩篇を愛讀されるが捷路です。第十九篇は穹蒼を、第百〇四は森羅萬象を歌ふて神を讃稱てゐます、第四十五は鹿の溪水を慕ふによせて、第八十四はつばくらめによせての詠詩です、第六十五は雨露の恵を喜ぶ歌で、第百廿一は旅行の歌です。

早くお互が一ヶ月間の寢食を共にし祈り讀書し、遊び、休み、以て活力の貯藏所なる樂園の與へられる事と、又其所有者たるの資格を永久に獲得せんことの爲め姉妹もより强き御協力と御活動を願ひます。

自然と宗教

大阪　武本喜代藏

私は田舍漢です、山陰の片田舍に育ちました、私は曾て良師に就いたこともありません、名ある學校に學んだ覺へもありません、私の先生は自然です、山と海とです、太仙の氣高い姿は私に神の長への默示を語つてゐます、日本海の只もう鏡のやうに凪いだ、そして廣々した海面は私に輝ける永遠の御國を忍ばせます、美はしい自然に接しますと、田夫野郎も何時しか詩人に成つてゐます、私も其一人かも知れません。

が併し私は其後つく〲感じました、成程自然は神の力や美や、其尊い面影を示すけれども活ける靈なる神は自然を通して分るのではないと謂ふことです、神は只人に依つてのみ自らを示し給ひます、ナザレのイエスの外、天地何物も尤も具體的に、現實的に神を顯すものはないと思ひます。

私は曾て高野の山奥で深い冥想と祈禱に耽つたこともあります、が併し直ぐ失望して下山しました、神は必らずしも深山大澤に居給ひません、私は又數年前思ひに想ふて、富士の絶頂迄登つて又失望して降つて來ました、神は必らずしも靈山奇峯の中に住み給はないのです。

私は何所よりか私の部室で、窓ガラスがヤット薄白く成る頃、獨り眼醒めて靜かに祈る時に、一番能く神に近きます、靈感に撲たれつゝ聖書を拜讀し、主の現前を感じつゝ自分の罪を懺悔し、告白する時、神は確かに私の側近く居給ふことをさながらに感じます、「味爽にイエス早く起き人なき所にゆき、其處にて祈禱せり」と馬可は傳へてゐます。

夏の朝、未だ露のひぬ間に、起き出でゝ、東の空に薄紅の色を仰ぎつゝ得も云へぬ心地の好い、清々しい朝の空氣を呼吸しつゝ間近い森蔭か、庭石の上に腰打掛けて、聖書を讀みつゝ、心ゆく計り祈る時の愉快さは世に喩へ方はないと思ひます。

私は又貧しい白屋で、病人の側で祈ります、貧に窶れた病姉の姿、正直で、神を慕ふ、僞りのない其言は私の心を溜らなく感動させます、「神様よあなたはよし王の御殿に居給はぬことがありましても、此貧しい、病牀を離れ給ふことはございませぬ」と云つたやうな祈りが自然に口から出て來ます、神を慕ひ、神を憬がるゝ貧者の心には、神なき王宮にも優つて神は近く住み給ひます。

神は無限大ですから宇宙の涯の涯迄居給ひます、が併し同時に又無限小です、神は針の尖にも宿り給ふことが出來ます、從つて神は無際限の天體を司動し、星の運行を定めながら、近く／＼私の机の前にも、飯臺の側にも居給ひます、神程遠いものはなく、又神程近いものはありません、我等の理智も、想像も到底神を知ることは出來ないのですが、同時に又活ける基督として近く我らに來り、共に語り、共に飮食することさへ出來るのが我らの信ずる神、則主イエス、キリストの父なる神であります。

高い山、深い谷、靜雅幽邃の地、人里離れた自然の懷の裏で、何の妨げもなく神と交ることも結構ですが寧ろ私は活きた人生の動搖波瀾の裡に神を認め、神と語り、直接神の光りを受けて、活動した方が更に一層結構だと思ひます。神を名山大河に探つたのは古人の迷想です、私共は神を何より近く見て、信じ、愛し、其力を受け、直ちに家庭に、社會に、其光りを輝かしたいと思ふてゐます。

が然し私は自然を愛します、私は神の子であると共に何時迄も自然の子でありたいと思ひます、昔フランシスは靈的力の缺乏を感ずる毎に、鳥のやうに、何時でも山に飛んで行つたと云はれてゐます、主も屢々山

に退き給ひました、況して我らをやです、私共はモット靜かに自然に近き、榮光の主を仰ぎたいものです、文明人は禍ひなる哉です、餘りに急はしく、騒々しく、靜かに神の聲を聽き、神の御旨を伺ふ時を持ち得ないのです。猛省を要します、キット其結果は我らと、我らの子孫に傳つて來て、永久に心身共に苦むに相違ないと思ひます。

講演斷片

シャボ天とバナナ

植村先生

米國南加州邊りに行くと大きなシャボ天が原野に起立して居る異觀を見る事が出來る。一體シャボ天は刺のあるものであるが、有名なフエヤバンク氏がいろ〱研究の結果、其刺を取る事に成功して刺なしシャボ天が出來、之が家畜の食量になつて居るといふ事である。抑々フエヤバンク氏は植物の刺を除いたり、大きな種子を果物の中から取り去つたり、惡臭の花を變じて芳香にしたり、常に植物の中によき變化を案出して居らるゝ事は世人熟知の事實であらう。

之を宗教でいふならば、我々の性質には實に刺があり勝ちで、無用の長物の如き觀があるが、其刺をとり無用のものが有用になるといふ事は實に主イエスの力である。然し我々は唯刺が取れたといふのみで滿足す

べきではない、基督者として立つて居るものは花も咲き實も結んで居なければならぬ。而も其花は醜く惡臭を放ち、其實は小く見貧らしく、役にも立たぬやうであつてはならぬ。臺灣のバナナと內地の芭蕉の實とを比較して見ると、芭蕉の實の如何にも取るに足らぬつまらぬものである事がわかる。我々はどうか立派な滋養に富んだバナナの實になりたいものである。然し大概の人は唯力んでどうか立派になりたいものだ〳〵と所謂努力奮鬪のみに依賴して居る、然し自己の力にのみ賴つても立派な實を結ぶ事は不可能である。

　然し此處に我々はキリストの御力に賴る事によつて大なる變化を內部にうけ、立派な花をも開き、實をも結ぶものとなり得るのである。のみならずキリストの力に依り毒が變じて藥となるやうな場合も往々ある。所謂惡に强いものは善にも强いで、神の不思議なる御力により、今迄の弱點が聖化されて長所となる意外な變化を來す事は事實である。我々基督者は皆刺なき木となり、美しき花を開き、立派な實を結ぶに至らん爲神の御力を切に仰ぎ望むべきである。(在文責記者淺井)

神の國の精神

高倉先生

「基督教は一の中心より說明し得る圓にあらずして、二つの焦點より說明すべき楕圓なり、其焦點の一つはキリストの贖、他は神の國なり」とリッチルは云つた。宗教家の陷り安い弊害は、自己の靈魂が神の中に沒入して、其中に一種の法悅をおぼへ客觀の世界を忘却する事と、之に反して唯客觀にのみ生きて自己の靈性が深き神との接觸に至る事を努めぬ傾向との二つである。これを日本の宗教に依つて說明すれば前者は淨土眞宗の如きで、後者は日蓮宗の如きである。

基督教は此兩方面の長所を交へて居ると私は信ずる。即ち眞の基督者は聖靈の力により自己の靈魂をいよ〳〵深め行くと同時に、聖旨の實行者とし神の國の建設者として世に立つものである。基督の教訓の中から「神の國」の教訓を取除く事は出來ぬ。彼の教へし神の國とは勿論有形的の組織制度ではない。それは精神的のものである。聖書中神の國の精神の最もよく表れて居るのは主の祈とルカ傳十章の「大なる誡」とであらう。此二つの中に神の國の根本精神が云ひ表はされて居る。即神と隣人とに對する愛が其土臺であり、赦免の精神が其中に流れて居らねばならぬ。而して人の價値は全生活を傾倒して神の榮の爲に聖旨の儘に生んとする所に生ずるのである。

「人生のディレンマは自己の偉大を求むるか神の偉大を求むるか、此二つの選擇の間に横つて居る」とスポルジョンは云つた。我々個人の信仰生活は、神の偉大を求め、彼の榮光の爲に働く事に於て、眞に其面目を發揮する事が出來る。之と同じく一の團體の價値は其中に如何に多く神の國の精神か實現されつゝあるか如何に鮮に其精神が生き動きつゝあるかによつて評價せらるべきであらう。（在文責記者河井）

斷食堂について

K、O生

九州日向の國に斷食堂と云ふのがある、どう云ふものか聞合せたらば面白からふと河井先生が申されました。幸ひ彼の地には舊岡山縣高梁敎會の牧師であつた溝口貞五郎先生が延岡敎會の牧師を只今遊して居られますので同氏へお尋ねしました所御親切にも早速左のやうな御報知を得ました。

「斷食堂」の件は能く知つて居る樣で、さて書かうとすると、何も知らないことを知りました。設立者は元大阪浪花（組合）敎會員で獻身的に敎會守をしたり聖書販賣をしたりして居つた方、藤井捨吉氏です。其經歷には人を驚かす樣なものがあります。初め氏は京都で女郎屋をして居たが大に感ずる處あつて、基督敎徒になられたのです。今より二十四五年前、岡山病院長菅氏の診察を受け、孤兒院迄歸る丈けが危險であるといはれ、萬一の用意に藥を買つて歸る途中、院よりは迎ひが來るといふ樣な事もありましたが、其儘單身全國を巡禮し今に存命です、實に不思議と云はねばなりません。

故石井院長が斷食療養の效能を說かれましたのに感じ、氏の遺志を繼ぐといふ如き考で唯今の斷食堂を經營せられたのです。堂の位置は縣の南方宮崎を南に七里位を隔つる折生迫字湯山と云ふ處です。海邊を去る數丁の山の上に一寸した四方屋があり、それが祈の聖場で、其下に二家程の住家があります。今はもつと多くなつたかも知れません。兎に角そこで斷食をして祈禱に餘念なく日を送るのです。其やり方は別段記す程のものではありません。其附近に冷泉がありまして溫浴も出來ます。之も病氣に確かに效果がありませう。附近に靑島といふ檳榔樹で滿されて居る名高い島があります。海邊の山の中の事

とて靜で景色がよくて湯があり、冬暖く、夏涼しき處であるから其處で斷食、祈禱をして居れば大抵の病氣は治るでせう。藤井氏は今は組合を脱して舊教に入つたと聞いて居ります。若しこゝ二三日暇があれば圖入りの案内記を送りますが、往復日數がありませんから仕方がありません。遲れて殘念ですが一部送らせませう」

　斷食と言ふことについて且つて田島先生がこんな事を仰つたと人傳に聞きました。「それはキリストの山上の御變貌の直ぐ後山より三人のお弟子と下り給ふた時、麓では九人のお弟子が多勢の人々に取圍まれて癲癇病者を癒し得ないで困つて居ました。イエスは直にこれを癒し給ふたので弟子はひそかに何故私共はこれを癒し得なかつたのでせうと尋ねますとキリストは此類は祈禱し斷食とによらずば出來ぬと仰ついました。なる程私どもには斷食も時に必要ですがこゝの眞の意味は寢食を忘れる迄熱心になることであると」改譯聖書には祈と斷食と言ふことが省かれて、若し信あらば汝ら能はぬこと無るべしと言つてありますが、私共には文字に拘泥した斷食の必要はありますまい、而し信仰ある者には祈の生活が伴ひます。病める時また眞面目な仕事をせんとする時常時の祈よりも更に特別の祈が入用です、そして時には朝より夕に至る迄或は數日祈り〳〵て食事すら忘れ知らず〳〵に斷食しかくて病をいやされ幻な見、貴い事業を爲し得ることが屢々あります。斷食が私共を救ふのでなく、私共の熱心が誠心が自然と斷食に至らす精神が神に通ずるのです。

　キリストは祈の人でした度々山に登り靜に祈り給ひました、町に出ては病者を癒し悲める者を慰め氣の饑えたるものをあかし人の身靈救濟に寢食を忘れて働き給ひましたるはこれ又一種の祈です。私共も祈禱三昧の境に入り心を盡し精神をつくし意を盡し靈なる神を愛しかくて力を受け已の如く隣人を愛し奉仕の生活に我を忘るゝ貴い時を經驗したいもので御座います。

know a girl once who worked in an office in a big city. Every morning on her way to her work, she passed through a little park, where there was a tiny grass plot, and a few trees. She began soon to try to put that park into her heart for the day. When her master became impatient with her, when she became hurried and feverish, when she was very weary, she learned to close her eyes for a moment to see again in her heart the beauty and quiet green of that little park. And I think that quiet and peace grow into her face, because when the frowns and the tears felt like coming, she just looked into the little green place in her heart, and she felt its peace.

It is summer time now. Most of us will have some time to get away from our study or our work, and go out into God's green world. When David wrote the twenty-third psalm, he must have just been out in the country, and have felt the refreshment of the green pastures, and have put it into his soul, so that it became part of his religious life,-this quiet time of rest. And His heart turned to the goodness of God who gave him that restoration, and he wrote that beautiful song of praise, a poem from his heart. Will we bring back with us a new understanding of God, a deeper gratitude to Him, a realization of the meaning of His command, "Be still, and know that I am God"? Will we be able to close our eyes in the midst of hard days, and see again those outdoor places where we found rest?

Elijah ran away from the city where the queen was seeking to kill him, and he hid himself in a cave and cried out to God that he did not want to live any longer, for he did not know what to do now. Then he listened for the word of God to come to him. First there came a great wind that seemed te tear the rocks from the mountains. But that was not God's voice. Then there came an earthquake that made a mighty noise, but that was not God. Then there came a fire that swept about him with all the power and red light that a mighty flame has, but God was not in that. And then there came a still, small voice, which spoke very quietly to Elijah's heart, and told him what to do. Will we have a time when we will listen for that still, small voice, or will we be too busy visiting and having a good time to hear it? Jesus says, "I stand at the door and knoek", and he will not come in unless we hear the knock and invite him in. And He longs to dwell in our hearts with us.

"He maketh me to lie down in the green pastures, He restoreth my soul". And may we gain there in the green pastures, a deepening and sweetening of our lives, and carry within our hearts the quiet places to which we may go for rest, and for communion with the God who speaks to us in the still, small voice.

英 文 欄

GREEN PASTURES

"At evening when I go to bed
I see the stars shine overhead,
They are the litte daisies white
That dot the meadows of the night",

When Stevenson wanted to write a poem about the night sky for children, that is what he called it--"the meadows of the night". Now sometimes we like to think of all the wonder that there is in the universe, --how the wo ld is really whirling through space, how the stars instead of being "little daisies white", are immense worlds larger than the earth, and how the light which we see sometimes takes years to reach to us. We are learning more and more of the immensity of the universe, and our minds delight in thinking of what more there is that we do not yet know. But there are times when we look upon the heavens at night only for their beauty, for the quiet and rest that is there, and for the calm that it brings us after a busy day. We can get a deep sense of peace from looking at these "meadows".

Our lives need these rest places just as much as they need the busy days of service, and God means for each of us to somewhere find rest for our souls. "He maketh me to lie down in the green pastures". If we were studying botany when we went into the meadows, we would look to see what kind of trees and flowers and grasses there were there, we would look at the leaves and learn about the scientific reasons why thy were green. But if we were coming seeking rest, we should do none of those things, but push them into the back of our minds, and just *feel* the beauty and peace there. The tree with its leaves and branches and roots becomes almost friendly, there seems to be a spirit there speaking to us. We become poets in our appreciation, even though we can never put the poem into words. It is then that we can understand the poet who wrote,

"Poems are made by fools like me,
But only God can make a tree".

For God is surely there in the green growing things, and He has made it all beautiful for us. How easily we forget this quiet and become absorbed in the turmoil of the day's work or study. We find it hard to keep the green pastures of quiet anywhere within us. I

結婚式の記

坂本花代

六月が去り七月に入ると、梅雨も晴れ、暑さも俄に加はり、いよ〳〵夏が來て、修養會、暑中休暇と暑い中にも七月といふ月は何だかいつも一種の喜びと期待とを與へるが、今年の七月は、子供らしい氣分の自分には一層の喜びを與へた。私共の七月早々のプログラムは實に忙しさと喜びとに滿されたものだ。七月四日はミスカフマンの御歸朝、七月六日はミスクダニングの御結婚式。

一九二〇年十二月二十三日の晩クリスマスの祝會が小石川區の新渡戸博士の邸で催された時「今晩は皆樣が驚く樣な嬉しいことがある」との豫告があつた「何だらうか」と不思議に思つて居ると、やがて列を作つて、クリスマス、ツリーに飾りの樣にぶらさげてあつた赤、綠の小い包を一つづゝ頂き、ミススカットの御與へになつた合圖に小包を開いた。すると可愛らしい花籠の下に置かれた封筒の中のカードは、ミス、ダニングと、ジーマン氏との御婚約の御知らせであつたので、皆で御目出度う〳〵と連發した。

其の時より恰度六ヶ月程後の七月六日、同じ新渡戸博士邸で、午後五時に結婚式は擧げられた。

いつもおくれるから今日こそはおくれない樣にとの事で、定刻よりも早く伺ひ、式のはじまるまではお庭を散歩したり、御話したりして、定刻になると大廣間の兩側にお客樣は二組に別れ、靜になると、ウエディング、マーチが始まり、フレミング牧師を先頭に新郎ヂーマン氏とベメト、マンのスミス氏とが、聖誕の喜びと、今御結婚なさる御方々の婚約の

喜びを告げた、クリスマス、ツリーのあつた處に進まれると、美しい茄子紺の絽の裾模樣に、それにふさはしいブルーに銀の水草模樣の帶をしめられ、すらりとしたお丈がいや高く、平常よりもづつと〱美しく見えた加藤幹事を先頭に、丈なす髮を下げ少女の姿をした、ダニング樣の聖書の組の御方々が、白のリボンを持つて進まれ、兩側に別れ、花壇ならぬ、花の處女の垣を持つ道はつくられた。「この道を進み行く人は幸なるかな」と叫び度い程だつた。靜々と薔薇色の美しい御召物と同じ色の帽子を召されたブライヅ、メードのミス、フエリスが花束を持つて進まれた。流石に體操の先生だけで足の運びの美しさ、マーチと、歩む人の姿とよく調和がとれた。次には七歲位と思はれる白い服を召したフエルプス氏の可愛らしい御令孃が、フラアー、メードで片手に美しい花籠を持ち片手に花を播きながら進まれ、此の可愛らしい、美しい御姿を見ると何故か自分は淚が出る樣になつた。次には花嫁樣のミス、ダニングが白のレスーの裳裾を引きヴエールはオレンヂの花で飾られ、いつも血色のよい御顏、縮れた金髮はこの純白な裝で一層引き立ち美しく、薄い藤色の裝のメード、オヴ、アーナーのミス、カフマンと共に花の敷かれた道を進まれた。

やがてフレミング氏の祈禱あり、續いて嚴肅なる語調で「困難にも病にも……」と、新郎新婦に問答あつて無事に式は終り、お客樣方は、新郎新婦の前に進み御悅びを申し上げた。全くこの結婚式は美しい繪の樣に思はれた。食堂でポンスとウエディングケークの淡白した御馳走があつた。歸りを急いだお客樣の外は新婚旅行の門出を祝さんと居殘つた人も多かつた。

午後六時半頃新郎新婦は食堂を出で二階に上られた。階上から、花嫁樣が今まで手にして居られた、美しい匂高い蘭や薔薇の花束を投られた。これを拾つた人は一年以內に結婚するのだと、多勢階下で手を擧げて待ち構へたが、拾つたのは私とミス、レー

シーとで皆様からからかはれた。ミス、レーシーも旅立の御手傳ひか二階に行かれたので、花束は私が頂き、聖書の組の御方々をはじめ皆様に一本づゝ花をわけて差し上げた。

花嫁様は白のレースの襟飾りのついた褐色の服に焰色の帽子を着て新郎と御出ましになつた。新郎新婦が別れを告げて自働車に入りかけると、カンフエテイー、カンフエテイーと御友人方が云はれ、すると一人の御友人が「この小い包をあけて下さい、カンフエテイーはこの中に」と云はれた。荷物など積み込まれて居る間にカンフエテイーを新婦新郎に投げ付けられ、時ならぬピンク、ブルー、白の雪の如き紙片や、虹の様な長い紙片は自働車の美しい裝飾となつた。降り出し相な空も今日の目出度さを祝ひてか降らず、新郎新婦の門出を共に祝つて居る様で、友人達も皆喜びに滿ちた顏をし、嬉しい聲をはり上げて、ブーツト音を立てカンフエテイーの美しい紙を風にゆら〳〵させて出て行く自働車を見送つた。

ブレシコフスカヤ（抄譯）（七）

森田松榮

渡米後、ボストンに於て開かれた、彼女の歡迎會の席上で、三千の聽衆に對して、ブレシコフスカヤは左の演説をした。

「ロシアから遠い皆様は、山や海を越えて、ずつとずつと遠くにある國とその問題に就て、熱心に話す者を奇妙に思はれるかも知れません。ボストンの美しい明るい會館に靜かに腰かけてゐられる皆様はロシアの淒慘な牢獄と、ロシア民衆の先驅者と、專

制なロシア政府との間に、もう幾年も續いてゐる必死の戰鬪とに、何の關する所がありませう？　戰つてゐるのはずつと遠くの彼等、より善い將來を與へる爲に、苦難を嘗めつゝあるのも、死につゝあるのも彼等です。殉難者が呻吟してゐるのも、其家族の淚が流れてゐるのも、自由の戰士が傷けられ殘害されてゐるのも、實に彼所なのであります。

「彼等の運命は、皆樣とどう關係してゐませう？

幾年か前、陰欝な沈默に圍まれて私が監獄に座つてゐた時、私の獄房の潜戸があいて、封筒が眼に入りました。それは遠くからの挨拶、瑞西に於ける私の同情者の一群からの祝福でした。其時私は幸福でした。獄壁の外に、私を理解し、同情し、援助しやうとしてゐる友愛深い心がある、といふ意識は、私の元氣を回復しました。監獄の壁は私の前に開いて、私の心は新らしい危險と艱難とに逢ふべく、怖るゝ所なく高く翔りました。友よ、進步思想の一切のロシア人にとつては、ロシア全土が廣大な牢獄なのです。……中略

「ロシア專制政治に對して、進步分子がやつてゐる鬪爭は、單に困難な許りでなく、危險なこと、危險な許りでなく甚だ費用のかゝることは、誰もが知る所であります。專制政治は、憲兵隊、警官隊、密偵隊を自由にしてをり、ロシアに於て自己と見解を異にするものを、悉く搜索し根絶する爲に、數百萬圓を費消します。他方には單に、金なく、迫害死に至るの民衆の群があるに過ぎません。我々は、襲擊され、捕縛され、投獄され、流刑に處せられてゐるので、集まつて團結する時が殆ありません。ロシアでは、或は投獄、或は流刑、或は國の爲に働くことを出來なくする警察監視の下におくことによつて、最も善い、最も才能ある、最も氣力ある一萬人の男女の働きを、政府は、年々國民から剝奪してゐます。

「それにも拘らず、我等は何を見ますか？　我々はロシアに於ける進步的な運動が、日々に發達し、あらゆる階級が、廣く且聰明な役割をしてゐるのを見

ます。專制君主政治制度は、凡ての民衆の甚しく嫌ふ所となり、それから生ずる害毒は、民衆を滅亡の淵に臨ませてゐますために、直接玉座の周圍にゐる無主義な少數を除くの外は、現在の制度を繼續させたく思ふものは、一人としてないのであります。この故にこそ、解放の用を爲すべき一切の事を、撲滅し盡さうとする政府の努力は悉く空しくなり、ロシア農民の大衆にまでも浸潤わたつてゐる進歩思想が勝利を得ていく進行を、留めることが出來ないのです。………

「私が此所に參りましたのは、成功が、覺束ないからでも駄目だからでもありません。殆ど我々の豫期以上の仕事の、擴張と成功とが、我々をして、餘儀なく、自由な民衆の同情に訴へて、苦しみつゝある我國全體に、勝利が幸福を齎らすべきこの天下分目の決戰に當つて、援助を願はしむる次第なのでございます。………

「あらゆる奮闘は、精神的と物質的との二種の手段によつて行はれる事は御承知の通りであります。私は皆様に、この兩方の援助をお願ひ致します。

「然し、ロシア民衆の此復興の徴は何所にあるか？遲鈍で、無智で、畜生あつかひにされてゐる、そして、主として幾百萬の農民からなつてゐる此等の民衆が、一旦自由を獲た曉、それを合理的に使用し得るといふ何んな保證があるか？ と皆様はお訊ねになるかも知れません。

「第一問には、ロシア政府自身が答へてをります。政府が現在行つてゐる卑怯にして僞善的な行爲は、政府自身の弱味と進歩運動を怖れてゐる事とを證明してゐるのであります。………中略。

「今後、ロシア民衆は、自分達の仕事を、ザーや大臣達よりも、より善く處理し得やうかなどゝいへませうか？ ロシア民衆が全體として、彼等の常識と勇氣とによつて、彼等自身の運命を決し、彼等自身の歴史を作る能力ある事を示したのは、一再に止まりません。過去を尋ねると、彼等自身の手と、自身

の發意とによつて、歐部ロシアの北部全體と、黒海及びカスピアン海の周圍なるシベリアのやうな、大領土によつて、彼等の國を擴張したのは、實にこの同じ侮蔑された農民であることがお分りになります(中略)四十年前、彼等が解放された時にも、ロシア農民の唯一の富であり、唯一の生計であるところの「神聖な土地」を、ザーが正當に與へる事を忍耐深く待ちつゝ、彼等はその品位あり思慮ある事を示したのであります。民衆はザーよりも遙に聰明でした働かず何もしないでゐる人達は、扱ひ樣も辨へない土地を貰はうとしてゐます。民衆は土地を與へられないならば、生活費を得る唯一の道なしにされて了ふのである、といふ事は、働く人々、働いてロシア全帝國を養ふ人々には分りましたけれど、到底ザーには分り樣がなかつたのであります。

「後に、諸地方が各自の議會を有する權利を獲た時に、民衆の勞力から獲る金と、他の資源との、消費方法の模範を示したのは、農民ではありませんでしたか? 今日に至るまで一人の貴族なきV及びPの二州は、最も善い學校、最もよい道路、醫師及びあらゆる種類の圖書館と、工業學校とを、多く有し、農民の爲に、その議會が發行する新聞さへあるといふことは、歐洲何處に於ても、他に類例のない事でございます。

「今日は農奴の解放以來四十年、我々主義者が、初めて彼等に敎へ出して以來卅年になります。今日の變化はどうでせう! 農民は見違へる許りに進步發達してをります。經驗は苦しんでゐる我が國の眼を開きました。彼女はもはやザーを信じません。彼女は彼い價値を知つてゐます。彼女は、自己の幸福の爲に働くべき實力と才幹とを自覺して、自由を求めてをります。國民の眞の幸福に對して、無智であり且つ敵意を有つところの、政府の意思に盲從する事を、もはや彼女は欲しないのであります。

「以前眼に一丁の字なく、事物の狀勢を理解し得なかつたこの同じ農民は、今や彼等の肉體精神兩つな

がらを壓倒してゐる軛をのがれる最上の途を示す爲に、我々が幾百年となく彼等の間に配布してゐる書物や小冊子を完全に讀み、且つ理解いたします。今や幸福な時代は來て、民衆が我々のものを讀み、傾聽する時、我々の文學、助言、我々の偕にゐる事を歡迎する時にあたつて、あらゆる眞なるものを迫害し、あらゆる偉大なるものを迫害するロシアの邪惡な力即ち專制政治は、今猶我々に敵對してゐるのを見るのであります。然し、今日は我々の方が強いのであります。民衆は我々の味方になつてをります。我々は如何なる犧牲を拂つても、民衆の爲に盡さなければなりません。故に、救ひの時の近いのを覺つてゐる我々は、自由の友のすべてに訴へます、「どうぞ我々を理解して下さい、どうぞ我々を助けて下さい」と。

「ロシア專制政治の廢止は、歐米にある他の諸國民に、密接な關係のある問題でありますから、我々は一層の確信を以て、かく申すのでございます。我々は、皆樣も御承知の如く、ロシア專制政治の統治下にあるアーメニア人、波蘭人、芬蘭人、猶太人達の運命はどうであるかを知つてをり、又それが喜ばしいものかどうかをも知つてをります。(中略)正義と一般の爲の善の名に於て、友よ、私は皆樣に懇願します。暖い心の天分の豊かなその民衆と共に、我々の廣大にして美しい國が、出來る丈早く自由になり、文明になるのを見得るやう、どうか出來る丈、御援助下さることを切にお願ひいたします。」

この演說がすむと、熱狂的の大喝采で、義捐金が集められた。

閉會にあたり、數百の群衆は、演壇の上に押寄せて、握手しやうと手を伸し、中には彼女を歡迎する爲に、自分の子供達をさしあげる者もあつた。

彼女は各地で演說し、ウエルスレ女子大學でも演說した。彼女は自國人からは、更に一層の熱誠を以て歡迎された。フヒラデルフヒアでは、二千人のロシア男女が彼女を「アメリカに於て殆ど先例のない

示威行列」の對象にした。某所では彼女の演説が終ると、民衆は總立ちになり、帽子は盛に振られ、喝采は五分間に亘つた。それから會衆は、怒濤の樣に演壇の方に押寄せ、高齡な自由の殉道者を抱いて、勝ち誇つて肩にのせ、聲が涸れ盡して了ふまで唱ひながら、會場の周圍を一時間もまはつた。會の發起人達は、彼女の讃仰者達が、熱誠の餘り、彼女の生命を縮めはしまいかと心配した。此人達は、彼女が演壇のそばに擔がれてくるのを待ち、いきなりとび出して、群衆から彼女を運び去つて了つた。彼女はヘト／＼になり乍らもなほ熱心火の如く、控室の椅子に腰かけて、自國人のところにもう一度行かせて與れと懇願した。又群衆は幾度となく襲つて來て彼女に屆かうとした。みんなは彼女自身の爲に、熱誠の表示を止めなければならない、といふことを、群衆に納得させるのは、容易なことではなかつた。

　彼女の個人的印象は、彼女の公開演説が與へたものよりも一層深甚であつた。某紙から左に轉載する。

「この銀髪の使徒の顔を仰ぐと、祝福を受ける思ひがする。彼女の態度と精神との沈着する、偉大なものである。彼女の手は、幾年月のシベリア生活にも拘らず、優雅にも美しい其聲は低く甘美で、微笑は愛嬌があつて子供の樣である。たゞ彼女の眼ばかりが今迄の艱難を語つてゐる。平靜な時のその顔は、鐵の樣である。……」

　又某氏は左の如く書いてゐる。

「先日、私は子供部屋に入つた。二歳から九歳迄の四人の子供は、短い白髪を大きな頭の上にゆるく梳づつた立派な、質素なみなりの大きな婦人を眺めてゐた。不思議な人形の話を、人形の藝やら踊りまで芝居でも見るやうに、彼女が説明しながら話した時その輝いた眼には歡びが溢れてゐた。小さな四人はたまらなく面白い談話者と、恍惚として了ふ樣な話に、丸つきり無中になつてゐた。それがすむと、彼女は眞中の低い椅子に腰かけて、ひつきりなしに、いかにも面白く話しながら、紙を切つたり疊んだり

して、たまらなく可愛い形――鶏、舟、籠、人形などを、それからそれと、すばやくこしらへていつた。ぢきて人みしりする三歳の子は彼女の膝に登り、子供達はすつかりなついて了つた。

「談話者は、ロシア流刑囚のブレシコフスカヤであつた。

「どうして、彼女は、その恐ろしい經驗の中を、彼女の中に、生々したこの子供心を持ち續けて來られたのだらう？　彼女の同囚の仲間は死に、又生きてゐても健康が駄目になつてゐる。苦難と寂寞から發狂したのも多い。彼女を救つたのは、あの絶壯な體格許りではない。この子供心である、それに生々した想像力と、鋭敏な諧謔味と、未來に對する高大な信念が伴つてゐるのである。

「幾年つて、冷酷な目に逢ひ通しでいらつしやつたのに、あなたには、苦々しさのかげもないのはどうしてでせう？」

「それはね、私が進化を信じてゐるからです。私が私の光に從つて行動する樣に、彼等は彼等の光に從つて行つてゐるのだと私は信じます。

『あなたは大きな希望によつていらつしやるのですね？』

『大きな幾つもの希望にです』と答へた彼女の偉大な眼には、幾世紀の世界苦から生れた深刻さがあつた。

「ブレシコフスカヤは、實に愉快な對手である。彼女は無私で、他の人々に興味を有ち、書物や、音樂や、繪畫が好きである。で、すぐに家族の一員の樣になる。彼女は著るしく單純で、希望に充ち、剽輕で、時には隨分陽氣な位で、ごく人間らしい婦人である。そしてその稀に見る美しい人柄に接するすべての人々から欣仰と愛とを獲る。」

「輝いた眼と、氣高い顔と、音樂的な聲とを以て、夕方火の傍に座つてゐた彼女は、我々の近代的物質主義に、偉大な過去の、單純と、詩と、獻身とに、その原始的道德と、豫言的鼓吹とを併せ伴なつてく

る素晴らしい女豫言者のやうに思はれた。」

アメリカ滞在中に、プレシコフスカヤは、生涯の友を幾人か得た。

ロシアに歸るべく、彼女がアメリカを出帆する時二人の同行者がゐた。一人は、多年の政治流刑囚でシベリアから脱走し、生涯恢復し得ない健康になつて、米國に來てゐた人だつた彼は、肉體的には廢物であつたが、意氣猶壯で、戰を新にすべく歸國するのであつた。他の一人はロシア名家の娘で、米國に既に二年ゐて、生活費を稼ぎ乍ら、ロシア農民の中に敎師となつて働く準備をしてゐた若い婦人であつた。彼女は、宣傳者が捕まへられて、監獄か流刑にやられる前に、仕事の出來るのは、三ケ月が普通であるといふことを、すつかり承知の上で、歸國するのであつた。某氏は右の問答を記してゐる。

「あなたは三ケ月の活動の爲に、二十年間の、もしかしたら永遠の、あなたの自由を、自ら進んで犧牲になさりたいのですか？」

「ええ、ええ、私達の國の、氣の毒な民衆が、學んで自由になるのには、多勢の人がさうするほかないのです。ほかにどう仕様がありませう？　多勢がシベリアに行きます。私だけ行かないわけがありませうか？」

プレシコフスカヤを中央にして、この三人が並んで甲板に立つた時、彼等は革命の過去、現在、未來を代表してゐる樣に、某氏には見えた。

プレシコフスキーは主義の爲の、約二萬圓を携へて歸國したが、その大部分は、米國にゐたごく貧乏なロシア人が出したのであつた。

彼女の感化によつて、アーサ・バラドと多くの他の米國人とは、ロシアに行つて、革命運動の實戰にたづさはつた。

ロシア革命に就ての彼女の豫想は一九〇五年に殆成就した。全國に亘る大きな總同盟罷工と、舊制度の變革に對する全國一致の要求とは、ザーを驚怖させて、國民議會の裁可、及び他の緊急な改革と共に

言論出版の自由を約せしむるに至つた。如何にこれ等の約束が、悉く破棄されたかは、今は歴史の語りぐさである。一時さしそめた自由の光は、ザーが矢継早に出す法令變改の黒雲によつて、つゝまれて了ひ、專制政治は指も染められずに完全に保たれ、言論の自由は間もなく取り上げられて了つた。監獄は再び國家最良の男女を以つて充ち、シベリアへの政治流刑囚の行列は、益人數を増して續いた。主義者達が、再び活動し出したのに自然の事である。

ある男の裏切りによつて、一九〇八年、ブレシコフスカヤは再び捕縛され、長い間、審問もなくて、聖ペテロ聖パウロ要塞に禁錮された。

ブレシコフスカヤの親友である米國人パウロ夫妻は、彼女が非常に衰弱したといふ報を受け、一九〇九年相携へて萬國監獄委員を巴里に訪ふ爲め、渡歐する手筈をしたが、パウロ夫人が一歩さきに行く事になつた。パウロ氏は妻に云つた。

「若し、あなたが「おばあさん」を助けられるなら、行らつしやい。あの人の爲には、私は自分の生命も棄てやうし、又充分棄て甲斐があつたと思はう。」

パウロ夫人は三月に出帆した。ペテログラードに着くや否や、夫が重病であるといふ海底電信を受取つた。彼女は急いで歸國したが、もう間に合はなかつた。一ケ月の後、彼女はロシアに向けて再び出發した。ブレシコフスカヤは、この忠實な友人が、彼女の爲に、二度まで米國からペテログラードまで來てくれたといふことを、二年後まで、丸つきり知らなかつたのであつた。（未完）

「人の子はなんぢの翼の蔭にさけどころを得、なんぢの屋のゆたかなるによりてこと〴〵く飽ことをえん、なんぢはその歡樂のかはの水をかれらに飮しめたまはん、そはいのちの泉はなんぢに在り、われらはなんぢの光によりて光を見ん」

日曜日を守ることについて

MK生

今年十月スウキーデン・ゼネバに於て第三回國際勞働會議に商店週休問題が決議さるゝ筈であります我國からも代表者が出席して其決議に預ることであります、就ては私共日曜日休業については特に注意しなければなりません。

一般にミシヨンの學校では日曜日嚴守であつて學校の稽古は勿論普通一般の讀書や洗濯裁縫、訪問、買物などは、日曜日に爲すべきものでないと敎へられて居ます故に未信者の家庭に育つた娘達にはそれが無意味で窮屈な思ひをさせ勝であります。信者中にも日曜日を守ることは餘り勵行されて居りませんしかし學校や、會社などでは土曜日半日、日曜日全日を休むことが一般習慣となつて來て居ます、其起原は西洋の風習をとつたので、西洋の某風習はキリスト敎の日曜を休むと言ふ點から來たのであります今こゝに其宗敎的問題を別として一週に一日休のある事は必要なりとしてこれを工場に勵行せんとする者が續々起つて來ました。商店では月の何日は休と言ふやうになつて來ましたが、早朝より夜間迄の商店は月に一度位の休では勞きます者に休養、修養の暇は決してありません。此點よりして識者が商店週休問題を提出したので東京では近頃其研究の會が時々あつて社會の注意を惹て居ます。私どもクリスト敎信者婦女子としてこれは充分に留意しなければなりません。第一、日常買物をする大多數は婦人にあります。其婦人がだらしなく夜遲く買物をしたり、少しも計畫を立てず不規則な買物を何時何日でもして居た日には、商店は休む日もなければ店を

〆切る時間も不規則になり勝です。若婦人が心を合せて、一週に一日は休日として、買物をせぬと言ふやうになつたらば店、小僧など何程助かるか知れませぬ。彼等が靈、智、體の三育を受ける事の出來ないのは一年中自分の職務を離れる事の出來ぬ理由で其結果は、彼等をして眞市民たるの資格を持つ事の出來ないやうになるのであります。

今日銀行が三時に閉ぢ土曜日半日、日曜日全休日としてもそれが習慣故誰も不足を訴へる者がありません。同じ樣に婦女子も買物は何時迄にし何日は休暇として認め、其心算で買物の計畫をたてたならば彼我共に利益を受くることがおびたゞしいものでありませう。其休暇日を日曜日にされる樣になると玆に我等信徒一般の禮拜においても盛となり、又家風も是れによつて大に改まることがあると信じます。今や宗教には沒交涉である勞働會議に於て此問題が決議さるゝ事でありますから、我國も同志者を多く糾合してこれに賛可したいものであります。左に研究會の公表した要點の數ヶ條を引證して置きます。

○商店週休は店主店員共同の利益なり。

○週休實行不可能と言ふは大なる社會に對する侮辱なり。

○夜間營業の短縮は店主店員共同の利益なり。

○買物を午後七時迄に濟すは店員同情の社會生活の改善なり。

○今の各商業定休日は到底記憶し得ず。

○休日を日曜日とするは一般社會の休日と一致せしむる意味なり

○一般社會の休日を休日とせざれば一家團欒が出來ざるなり。

○孤獨の休日は店主店員を孤獨ならしむる爲め惡遊の弊あり。

○今後青年の娛樂は運動遊技にあり。

○神經衰弱の店員を使用するは大不經濟なり。

○休暇は店員を墮落せしむると言ふは時代錯誤の言なり。

○休暇は店員を精神的に又肉體的に向上せしむ。

○資本家が週休尙早を叫ぶは店主と店員と共同利益なるを知らざるなり。

○週休問題は店主店員のみの問題に非ず一般社會の問題なり。

○顧客にして週休實施の不便利を訴へざれば其實施容易なり。

○社會が週休を認容すれば店主も店員も喜んで之を實行す可し。

○工場に工場法ある如く商店に商店法なかる可らず。

斷片詩

岡崎小文

○

瓢の花と打交り紫の朝顔一つ咲き出た
垣に小さくしかし安心して
名利の外の天地に、田舍娘が
奥庭に咲いて同庭に散るやうに
葉蔭に美しくしとやかに
たゞ受けし生をそのまゝ榮えに歸して。

空を自由に飛ぶ鳥の生
葉蔭に靜にゑむ花の生
流れて止まぬ行く水の生
何處よりか來て何處へか行く風の生
皆それ〴〵が喜しげに
御神の榮を稱えて居る。

○

大都の中森林の味をくむ
小さな池だが連波が始終ゆらいで居る
樫木が大などつしりとした腕をのべ
空より水に小さな葉がおどつてゐる
KとNと私と三人は其オークの根下に佇む。
風一陣何處より吹いて何處行く
カンラン山の森影に木葉洩れ來る光受け
銀髮風にふるへつゝ
眞理求めて尋ね來し人に
天の慈光に輝ける主はいと優しろに
汝もし新に生れずは神の國を見得まじ
肉によりて生るゝ者は肉靈による者は靈
風は己がまゝに吹く、人は其聲を聞く
されど何處より何處へと誰れか告げ得ん
靈によりて生る奥義示しませし
二千年昔の聲を今こゝに聞く。
水蓮浮くあたり尺に餘る緋鯉泳ぐ

岸の緑水にうつり漣波ゆらぐ池の面を
打守りつゝ細く輕く
「みどりのまきば」「我よろこび」「いつくしみ深き」
三人は聖歌を共に歌ふて
胸も澄み心も澄み
彼方の光の憧に靈と靈とが脈を打つ。

○

そよ〳〵と風が膚に觸るゝは心地よい
木葉が笑ふ髪が躍る。
しと〳〵と雨が降るのは嬉しい
葉末から玉がまろぶ心が躍る
おだやかな太陽がやはらかにほゝゑむのは嬉しい
花が香る小蝶が舞ふ
　平和な心の主よ
　　祝福の子よ。
暴嵐狂ひ木を折り家根を飛ばすは心地よい
物皆が捲上げらるうなりが後を追ふ
ザー〳〵と盆を覆す雨は嬉しい
電光がきらめく溜飲が下がる
赫々と燃ゆる太陽は嬉しい
道が白ふ光るミーラーが出來る
　革命の子よ
　　新世界の序幕よ。

○

雷がゴロ〳〵と鳴る
其響が腹の底にひゞく
嬉しさがこみあげて來る
雨が降る雲が晴れる
ゴロ〳〵、バリ〳〵、鳴れどよめけ
防禦の手を下すな鳴らねばならぬ此雷

○

露おびた朝の空氣を深く吸ひ
神祕の氣吹胸にしめ
大虛の中にしたる時
自由の大靈生くる時
私の靈は高く爽に歌ふ。

ピリピ書講解（十二）

——第四章——

佐波亘

主にありて堅く立て（一節）

攻撃は容易だが防禦は困難です。多人數の時には虚勢を張つても獨りぼつちの時にはとかく氣が挫け勝ちなものです。併ながら人生に於て私共は屢々獨りぼつちの境遇に立たねばならぬ場合に遭遇しますことに道德の戰と信仰の戰に於てそれが一層切實です。主義と信仰とに立ちて步まうとすれば私共は常に人生の寂寞を感じなければなりません。然も誘惑は屢かゝる機會に乘じて魔の手をのばすのですそこでパウロは主にありて堅く立てと言つたのです。イエスの場合を御覽なさい。イエス答へ給ふ、

「なんぢら今、信ずるか。視よ、なんぢら散されて各自おのが處にゆき、我をひとり遺すとき到らん、否すでに到れり。然れど我ひとり居るにあらず。父われと偕に在すなり……」（ヨハネ傳十六ノ三一）。マルチン・ルーテルの Ein feste Burg ist unser Gott.（讃美歌第四三七）も此精神を歌つたものに外なりません。

主にありて心を同うせよ（二節）

この兩人は教會生活に於ていづれも熱心な婦人であつたに違ひない。彼等は熱心のあまり衝突を惹起したのでせう。併ながら主にある者は幸ひです。彼らの間に於ては相互に讓り難く赦し難いにしてもたゞひとつ主にありて心を同じうすることが可能ます。これは實に基督者に與へられたる最大の特權と謂はなければなりません。擧國一致といふ文字がありませう。あれは常日頃は蝸牛角上の爭といつたや

うなことをして居つても、非常の場合にその共同の最大目的のために、一切を犠牲にしてその一大事にあたることを意味します。丁度そのやうに基督者はたとひ相互の間は小さな爭があつても、基督に於て常に一切が解決されるのです。また解決されなければならないのです。併ながらそこにはまた人力のすべてをつくすべき必要もあるのです。そこでパウロはなんぢに求む。この二人の女を助けよ……と言つたのでせう。卽ち彼はこゝに第三者を求めたのですイエスは、幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられんと仰せられましたが、こゝにパウロはこの光榮ある役目をはたす者を求めたのです。それは果して誰であつたでせうか。或人は此書簡の持參人であるエパフロデト、或人はピリピの監督、また或人は『我と軛を共にする者』といふ語からパウロの妻であつたらうとも言ひます。或はまたルカ、シラス、テモテ或はキリストのことだらうとも言はれます。それはとにかく私共は共同生活に於て常にセメントたるの役目をしたいものです。破壞でなく建設のために。

常に主にありて喜べ （四節）

この書簡の基調は『喜』です。そして常にといふからそれは人生の明暗すべての場合です。イエスは仰せになりました。人なんぢらを憎み、人の子のために遠ざけ謗り汝らの名を惡しとして棄てなば、汝ら幸福なり。その日には、喜び躍れ。視よ、天にて汝らの報は大なり。彼らの先祖が預言者たちに爲しても、斯くありき……。卽ちたゞ喜ぶのではありません。主にありて喜ぶのです。言ひ換へればイエスの心と同じやうに喜ぶのです。またそれは喜べぬ場合にも喜ぶのです。イエスは十字架に懸る前祈りの中に今は我なんぢ(天父)に往く、而して此等のことを世に在りて語るは、我が喜悅を彼らに全からしめん爲なり……と宣て居られますが、それは苦難の中でも十字架を前にしても、私共主にあるならば、その心は常に喜んで生活することが可能るといふことです

たとへばそれは海面にはいかに怖しい浪が立つても水底はいと靜かであるやうにです。そしてパウロの見るところでは、かゝる歡喜は私共が主にあるの外地上の如何なる條件でもそれを充滿すことはできないといふのです。

凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ（五節）

禮儀は他人に苦痛を與へぬことです。他人の正當な願ひに對して自分の願を差扣へるのが寛容です。それ故寛容は禮儀のやうに說くこともできます。それはまた犧牲でも說けます。勿論それはたゞ單に優秀な力に服從することを意味しません。それは寛大と柔和のより高尙なる衝動により差扣へることです。A Gentleman is a gentle man. といふことがあります。ダビデは「汝(神)の慈悲われを大ならしめたまふ」(サムエル後書二二ノ三六)と言つて居ます。イエスは天の父はその日を惡しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり」と仰せられました。そしてまた天にいます汝らの父の子とならん爲には、汝らの仇を愛し汝らを責る者のために祈れとさへ仰せられました。否、たゞに斯くの如く仰せられたばかりでなく、彼は實にその言通りに「柔和と寛容」でありました。

何事をも思ひ煩ふな（六節）

イエスは明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れりと仰せられました。またペテロ前書にはもろもろの心勞を神に委ねよ、神なんぢらの爲に慮ばかり給へばなり(五ノ七)とあります。またイエスはなんぢら心を騷がすな、神を信じ、また我を信ぜよと仰せられたこともあります。併私共どうすればそのやうに思ひ煩ひなしに一日を過すことが可能ませうか。こゝにはたゞ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよとあります。即ちそれは母が吾が子の涙ながらの話を喜んで聞いてくれ、子は吾が母の同情を期待するそれのやうに、私共が心をひらいてすべてを神に申上るのです。たゞそれは感謝の心

もてしなければなりません。即ちそれは私共が過去の恩寵を感謝しながらする必要があるのです。然らば私共が祈をした後私共の心はどういふ狀態にあるかといへば、こゝにはさらば凡て人の思にすぐる神の平安は汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らんとあります。

高尚なる念ひ（八節）

こゝに終に言はん兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる德いかなる譽にても汝等これを念へとありますが、それは數學の問題を考へるやうに私共が念ふことですそれは人生に於ける道德的の價値を凡ての問題に計上することです。聖なる生活にはそれが大切です。世の多くの人々は通常キリストを計算の中に入れませんけれども、私共はキリストが私共の思想を統御するやうにしなければなりません。言ひ換れば私共の思想を監督するものはキリストでなくてはなりません。それはコリント後書にあるやうに、神の示教に逆ひて建てたる凡ての櫓を毀ち凡ての念を虜にしてキリストに服はしむ（十ノ五）でなくてはなりません。

高尚なる努力（九節）

なんぢら我に學びしところ、受けしところ、聞きしところ、見し所を皆おこなへ、然らば平和の神、なんぢらと偕に在さんとあります。理想はこれを實行せざれば空想に終はります。理想はこれを實現させなくてはなりません。否、實現すべく努力するを要します。實行は說敎に勝さる。言肉と成つた一大事實（インカーネーション）は基督敎の特質であり、パウロは實に a practical idealist でありました。否彼は最も善い意味の a pragmatist でありました。彼はこゝにトマス・ア・ケンピスの of the Imitation of Christ（中山氏の譯があります）のやうなすゝめをして居るのです。即ち彼は自我をすてゝキリストを迎へ入れるたらば、天來の平和と力そこに生ずといふのです。

（次回、完結）

草とり

河井道子

修養會の地所候補地の下檢に一日葉山に行き松岡夫人の御別莊を訪れました。早速お湯のもてなしを受け旅の塵埃をおとして案內者に從ひ候補地を一週し又靜な、手入行とじいたお庭に歸つて來ました。

「あの土地は今草がのび〱して居るからよく分からないが、一度綺麗いに刈り取つて見ると廣さも明に分かりませう」と案內者が言ふ。

「まあ、あの茫々した笹や、葦や、雜草をどうして刈り盡くせませう」と云へば、

「まあ、彼の位何でもありません。三年前迄はそれは〱丈の高い草で、足入も出來ない程でした。手入をした爲にどうやら庭らしいものになりましたから彼の地など直に綺麗になります」

と夫人が言はるゝに驚いてあたりを見廻すと、到底三年以前藪地であつたとは誰あつて想像の出來る人はありますまい。外よりは高き石垣をめぐらし、其內側に喬木を植え其處より椽まで廣々たる塲所を一面に芝生とし、其間を小川の如く小徑を造り、それを小石で敷きつめ椽先近く右には圓大の水瓶に、金魚を入れ左側に、姫松數本自然的に並樹の如く植えつけられ其下に、大島百合花の蕾して居る間に、銅製の雄鹿、雌鹿の並んで居るなど、十數年も庭師が手入したものとしか思はれません。

「奥樣此お庭がどうしてそんな荒地でしたか、まあ之までに三年間になさつたとすれば、さぞ〱大した勞力を拂はれたのでせう。」

「それは大變でした。昨年なども暇さえあれば朝晩手入をしてひまが少しもありませんでした。又笹の種類は二尺も深く掘りかへして、其根を取り去りませんと直ぐに伸びて來ます。又小さくとも直きに種がこぼれて擴がる草もありますし、いくら芽を摘んでも、どし〱伸て來るのもあつて實に、草の生き

んとする勢は大したもので御座います。或る一種の草はそれはよく出て來ましたが、あまり根氣よく當方で頭を摘つた爲か、今年は出てない所を見ると多分日光に逢はない爲、根から腐つたものと思ひます。草をぬきながら常に思ひました事は、まあ世の中に惡い事の根はなか〳〵強く瀰漫し易く、種がこぼれ易い、是を刈り取り拔き取る其勞力を善事を伸す爲に使つたならば、何程社會も個人も、利益するものでせう。東京の眞中に電車汽車の音を聞きながら生活して居ます私どもは一週に一日こゝに來て草とりを致しましたのも亦嬉しい仕事の一つで御座いました。まあ兎も角、今年は芝生らしいものになりました。」

聖書に惡しき者は草の如く萠え出で、不義を行ふ者は榮ゆるとも遂には永久に滅びん。と言ふ句がありますが、是はよく今の會話の眞理を言ひ現して居ます。德富蘆花先生の「草とり記」のなかに左の句があります。

「草にも種々ある。葉もなく、花もなく、地下一尺の暗を、一丈も二丈も這廻り、人知れず穀菜に敵なす名なし草もある。厄介なのは地縛で、糸のやうな蔓とひげは直く切れて根を殘し、一寸の根でも殘れば十日經づに又一面の草になる。我々は世を渡つて往々此種の草に出逢ふ。……………草の種はかぎりなくとも取つた丈は草が減のだ、手には畑の草を取りつゝ心に、心田の草を取る油斷をすれば畑も心も草だらけである。吾等は世界の草の種を取り盡くす事は出來ぬ。しかしうつちやつて置けば、吾等は草の中に埋沒されて了ふ。吾等は生命の爲に草をとるのだ。我内外の草をとらなければ我等は遂ひに平和の内に腐つてしまふ。草がなければ農家は墮落してしまうだらふ。

たゞに草を拔くと言ふのみに止まらず、イザヤ書卅五ノ一「荒野とうるほひなき地とはたのしみ沙漠はよろこびて番紅の花のごとくに咲きかゞやかん」

これが神のお束約であります。

孤獨な自然

二階堂眞壽

わたしは東北のある高山に登つてそこに十日ほど全く孤獨な生活をしてゐたことがあつた。高いと言つても海拔六千尺位のところであつた。泊るところは山の宿であつて、頑丈な丸木の材木で建てたもので頂上から約五六丁下の山窪に烈しい風を避けて立つてゐた。背負つて往つた五升ばかりの米を氷のやうな水晶のやうな岩淸水で毎日磨いで、林のなかから拾ひ集めて來た枯枝で飯に焚くのである。

朝起きてみると佗びしいほど靜寂である。白い綿のやうな雲が靜かな海のやうに山麓の方にたむろしてゐる。朝日が射して來て大氣がやゝ暖まるとそれらの雲は浮動し始めて、何處へともなく流れてゆく——たぶんわたしの故鄕の小さな村の笹河や自分の家の屋上を通つて、あてもなく海を越えてアメリカの方までも雲はコスモポリタンの旅をつゞけてゆくのだらうと思つた。「いゝえそんなに遠くまでは往けません。」みるみるうちに雲の姿は變つてゆく。乙女のやうな雲の浮彫は、いつのまにか腰の曲つた媼の姿のやうに見えてゐる。なんといふ迅く飛び去る齡ひだ！しかしそれでもいゝな、あの雲のやうに蒼い蒼い大空を自由に翔けて廻はりたい。そして美しい村里の草原の上で遊んでゐる幼子だちの上に涼しい蔭翳を投げてやりたい。——「いゝえ。わたしどもの往くべき路は定つてゐるのです。美しい村里も可愛いゝ幼子達もみんな見棄てゝ流れてゐかねばならないのです。さようなら。」——雲はみんなわたしひとりを殘してさすらひの旅に往つて了ふ。

朝日が高く昇つて來ても深山はやはり寂寞なもの

だ。處女林の樹々は侘びしさうに默して、時々風のまにまに身顫ひをしてゐるだけだ。人里ならば人の聲や家畜の鳴聲など聞えて賑かになるのに、深山はやつぱり淋しさうなのだ。

　わたしはその山の宿に十日間寐起してゐた。その間に訪れて來たものは兎一匹だけであつた。茶褐色のまだ小さい兎であつた。お友達になりたいと思つたけれど、後足でぴん／＼跳ねて草叢の中に匿れて往つた。そしてもう二度と來なかつた。靜かな眞晝だ。どこかの深林で幽禽が鳴いてゐる。雷鳥といふのではなからうか。遠くで瀑の音のやうな奔流の音のやうな水音が聞える。わたしは笹叢を分けて往つてみた。巨巖怪石の中を勢よく清水が走つてゐる。岩に激して飛沫を散らし淀んだり小瀑になつたりして走つてゐる。「これが鳴瀬川の源なのだな」わたしは飛石を跳ねるやうに石を傳はつてさかのぼつたり下つたりした。なんとなく高天原から迷ひ込んで來た神代の人のやうに心細い感じがした。どこに往つても人が居ないのだ。やをまた大蛇に呑まれてもいゝから櫛名田比賣でもおられたら――と人なづかしくなるのであつた。

　人の嫌いな人よ。人を懷しみたく思ふなら、人のゐないところへ往くがいゝ。さうすれば嫌人症は實は人を愛さうとしてゐたものであつたことを知るかも知れないから。」

　山の宿のすぐ背後に所謂高山のお花畑があつた。名を知らぬ色々の草花が見る人もなしに淋しく咲きこぼれてゐた。毛氈苔が小さな露の玉を輝やかしながら一面に生えてゐた。その上を八月始めといふのに小さな秋とんぼが力なくつい／＼飛んでゐて、全く晩秋の感じであつた。此處へは春と秋とが同時にくるのである。

　夕方になると先づ山麓の村里の方から日が暮れてゆく。そして次第に山の頂上まで夕暗が迫つてくるのである。夜になると深い深い沈默が四邊を領する咳ばらひひとつするのも恐ろしいやうな沈默だ。た

ど異樣な光を放つのが深山の星だ。強く紫色の光を放つてゐる。それは此處には人里の塵がなく、大空が清澄なためであらう。神秘な夜の星だ。

人間は恁うした大自然の中に孤獨で生活すると全く自然から威壓されて仕舞ふ。どこか小さな穴にでもこそ〳〵と匿れて仕舞ひたくなる。ほんとうに人間は弱いものだ。「おゝ早く歸りたい。母や兄弟のところへ。村のお友達のところへ。」私は九日目か十日目にまだ殘つてゐた米もそのまゝそこに置いて、どん〳〵驅け出すやうにして山を下りて來た。麓の方へ近づくに從つて、萩だの萱だのいつも見慣れてゐる花に逢ふとなんとなく懷しい思ひがした。耕されてゐる山地の畑や谷間の田などひとしほ親しみを感じた。山へ昇るときはまだ稻の穗が出てゐなかつたのにもうころそろ穗が出揃つてゐる。「あゝやつぱり人のゐるところがいゝ」とつくづく思はれたのであつた。

それからもう一度、ひとりで一ケ月ほど夏の休を人のあまり來ない漁村に暮したことがあつた。毎日裸になつて海水につかつて原始的な生活をしてゐた語るにも遊ぶにも友がなくたゞ自然が友であつた。

浪が寄せは碎け、碎けては散る岩の崖、幾百千年波浪に嚙まれて洞穴のやうになつた岩陰に、わたしは終日眞裸になつて腰を下してゐた。岩の上を這つてゐる小さな蟹のやうな岩虫とわたしは默つて日光に曝されてゐる。たゞ浪が來て沈默を破るだけであつた。飛沫がかゝつても岩虫は動かうともしない。

さうして一ケ月ほど孤獨な生活をつゞけたら堪らなく都が戀しくなつたのであつた。押し合ひへし合ふ東京の電車の啀み合ふやうな人達にさへなんとも言へない懷しみを感じるのであつた。どうして東京に居たときあんなに人といふものがたゞ煩はしく避けて避けてばかりゐたのであらうか。人混みの中にゐては人の懷しさが解らなかつた。「人の居ないところに往つて始めて人を見出したのだなあ。」と思つた。

そしてこれからは怎うした人懐しさを銀座や須田町の中でも教會の中でもいつも胸に抱いてゐようと思つた。

「あまりに人に接して人に惱み人を嫌ふ人よ。一ヶ月ほど全く孤獨になつてみるがいゝ。多くの人に接して人を導くべき人よ。恒に心に孤獨を抱け。さらば汝の接するすべての人を涙もて愛することをえん。」（一九二一、七）

慈善 樂藝會報告

K・O生

世界大戰後中歐諸國物資缺乏、生活難の狀態は私共の想像の翼をのべてもとても察し得ぬほどの窮狀で或は紙の服を着、靴をはき得で跣足の者もあり食事不足の爲學生が授業中失神して倒れる者も少くないとの事です。如何にもして是等學生教師の救濟の一助でもしたいと種々の方法を考へ先づ廣く各地の女學校に檄をとばし救濟資金を募集しました。これに應じて女學生諸姉が續々御寄附金を御送り下して居ます。七月號の鈴蘭の獨言でお讀み下さいましたやうに二回本部の幹事達が花賣も試みました。而しもつと大々的に何かいたし度いと考へイ居ました矢先東京女子青年會で維持費を得る爲に小音樂會を催す計畫をして居るとの事でしたのでそれでは丁度幸兩者が合同して大なるものにし美土代町の青年會館を拜借して晝夜二回に渡つて開かふではないかとの相談がまとまりましてこの二つの目的で七月二日樂藝會を催すことになりました。

河井先生、加藤氏、ミセス、ウッド、渡邊氏の四人が主となられ他の幹事達も皆一致しましてそれぞれが出來るかぎりの力をそゝぎました。梅雨の時で

したから切符賣りにも困難が伴ひましたが皆喜んで善い業の爲に心をつくして働き得ましたのは感謝にたえません。一日のドシャ降りにはどつとした人もあるやうでしたが二日は幸ひと好天氣を惠まれ晴れ渡つたお暑い日でありましたので、アイスティー店は大繁盛またゝく間に賣れつくしました。賣店は坂本氏が主任となられお料理の組の方や其他の人々が心よくお立働きなさいました。

　プログラムは第一部クラシックな音樂第二部はアマチユアーの狂言やダンス其他第一部中のロシア聖樂其他合唱と言ふのが前日になつて故障が起き中止となりましたのは殘念でした。何と申ましても當日の呼物はアレキサンドロフ氏の獨唱でした、偉大の體軀、ゆたかな音量、美くしい旋律がホールに響き渡り人々の心を震はせ喝采は止まず拍手をもつて再び舞臺に呼戻しました。魂を打込んだ調音は人の魂を醉はせ高い美しい世界に伴れて行きます。黒人の歌は奇拔な思ひつきでした、唯少し長過ぎた爲多少ダレ氣味がありましたがしかし大變に面白ふ御座いました、ミスダニングがお集め下さいました十數人の男の西洋人が顔を手も眞黒に塗つてニグロの風をして滑稽を交ぜて歌つたり躍つたりされました、面白い中に一種の何とも名狀し難い悲調をおぼえさす點もありました。狂言もダンスもよく出來ました。たゞに其出來ばえと言ふ丈でなく、此度の出演者は皆奉任の念より會を助けたい人を助けたい、國境を超へた他の兄弟を助けたいとの美しいお心より舞臺などに立つた事のない方が勇氣をもつて喜を持つてして下した事は忘れてならない事です。

　私はこうした種類の仕事には二重の祝福があると存じます。見にゐらして下さいました方は晝間約七百人夜は千人餘でした、此等の人々の中には或はお義理でゐらして下したお方もありませうがしかしあのプログラムの中のどれかには面白味をおぼえ遊したことゝ存じます。そして其お出し下さいましたお金は善い業の爲に聖められて生きた働をすることを

思へば自ら樂しみながら人を助け益し得られる事です。セエキスピアーの雨は二重の祝福であると言ふ意の歌を思ひ起させられます。天は雨が降つて晴れ地は雨を受けて喜ぶと。今回の擧の成功には或は會場の便宜をお計り下した方切符を熱心にお賣り下した方など隱れた同情者の多くあることを書かずには居られません。今左に會計の方からの報告を載せます。

樂藝會會計報告（十年七月十三日調）

總收入	二、五二三、三三
總支出	三七六、五二
內譯　會場料	一五〇、〇〇
舞臺裝置	三五、〇〇
印刷代	五二、〇〇
演奏者禮	六九、三五
郵税	二四、八五
接待費	一四、六〇
裝飾其他雜費	三〇、七二
差引純益	二、一四六、八一
此別に東京青年會の茶菓子賣上收入	八二、一三五

中歐學生救濟御寄附金第三回報告

宮崎高等女學校職員生徒一同	（九州）	金六圓也
京都府立第三高等女學校職員生徒一同	（京都）	金參拾五圓也
日本橋高等女學校職員生徒一同	（東京）	金七拾圓也
廣島女學校青年會及日曜學校	（廣島）	金五拾八圓參拾五錢也
古川高等女學校々友會	（宮城）	金四圓也
金城女學校青年會	（名古屋）	金貳拾參圓也
横濱女子青年會		金貳拾七圓參拾錢也
SGクラブ	（東京）	金五圓也
東京府立第五高等女學校	（東京）	金拾九圓六拾九錢也
東洋英和女學校少年禁酒軍	（東京）	金貳拾四圓參拾六錢也
プール女學校青年會	（大坂）	金貳拾圓也
札幌女子青年會	（北海道）	金五拾圓也
カートメル女熟	（山梨）	金七圓五拾貳錢也
ブラジル公使ブリオン		金五圓也
寺田初代	（東京）	金拾錢也
梅花幼稚園青年會	（信州）	金拾圓也
大坂女子青年會（歐洲孤兒救濟ノ爲）		金貳拾貳圓五拾錢也
平野愛子	（東京）	金壹圓也
門田美喜		金參圓也
沖繩師範學校女學校	（沖繩）	金參圓也
室原富子	（横濱）	金參圓也
吉川とゑ子	（横濱）	金五圓也
尙絅女學校青年會	（仙臺）	金八拾四圓六拾五錢
大平耕成	（上海）	金六圓五拾錢也
河井道子	（東京）	金拾五圓也
遺愛女學校青年會	（北海道）	金六拾圓也

計金　五百七拾八圓八拾七錢也

累計金　壹千貳百拾五圓五拾六錢也

（大正十年七月十三日迄ノ分以下次號）

東京女子青年會（自六月廿一日 至七月十九日）

一ヶ年も歸國中であつたミスカフマンを迎へた本會は大きな悦と強き力とを感じて居ります。他職員は奇しき上よりの御指導を感謝しつゝ我からの活動の元素を養ふ爲一ヶ月程散り〳〵になります。が北神保町の會舘には歡迎いたす人が居りますから、何卒御立寄り下さい。

商工部。（一）第二回レゴード會。四のクラブ聯合主催、六月廿一日廿二日の兩夜會舘にて開催。純益金百拾五圓也。それにて四名の代表者を修養會におくる。（二）ビジネス、ウーマンクラブ組織の前身をして六月廿九日相談會を開き、內容、方針等を協議す七月十六日夜懇談會を開く。（三）招待會。三月九日午後五時半、青鳥クラブ員の働く勸業銀行の女從業員百卅名を招待す。夕飯を共にし會員有志のピアノ獨唱クラブのダンスの餘興の外、最近歸朝の志立やな子孃の御話あり。後一同フオークダンスを習ひ愉快に遊び八時半散會す。（四）第二回川崎富士紡訪問指導者等は體操遊戲を敎へたる後夕飯の饗應をうけ工女等の親切なる接待をうけたり。（五）夏期休養所（鎌倉七里ヶ濱）六月廿五日體育クラブ七名、七月九日芙蓉クラブ六名、土曜日より日曜及月曜にかけて出かけたり。海水浴は誠に好評。（六）夜間西洋料理講習會（七月十一日十三日十五日三日間）坂本花代氏指導。出席者十四名。有職婦人の爲。

家庭部。（一）六月廿四日午前キヤベツの料理會、七月十九日午前夏むきのシユベツト及サラダの試食會を開く。いづれも盛會。

教育部。（一）七月十六日午後三時文學會を開き生徒の英語對話暗誦ピアノ等あり是を以て學期の終とす

旅行者の友　本鄕湯島の事務所を神田會舘內に移す多年勤勞されし林房子氏辭職、目下北海道へ歸國。東京驛出口にある出張所には再び田中爲子氏を迎ふ。

樂藝會。七月二日午後及夜の二回催す。小野つゆ子夫人の多大なる盡力により第一部をクラシックなる

音樂となし、第二部は會員有志の援助及西洋人の出演により賑ひたり。（加藤氏報）

京都女子靑年會報告　林あき子

六月十一日の土曜日午後當會で最初の女學生のみのクラブ大會を開催いたしました。生憎の雨天にもかゝはらず三つのクラブを代表して五十五人の若い姉妹が集り京都教會牧師畠中先生の興味あるお話があつて後は親睦にうつり一同撮影の後時のうつるも忘れてクラブソングを歌つたりゲームをしたりしてたのしく過しました。

四月から今日までに一番教育部の中で盛であつた組は小兒洋裁組で多いときは一度に四十人程集り教師のチャプマン夫人は御一人で目のまわる程のいそがしさを覺えられました。廿二日には各自組で造つた服を小兒に着せて會館に集り子供のパーテーを催しました。一人で三人或は四人の御子様をお伴れの御婦人もあつてなか／＼賑がな集合でした。

手不足であつた英語の組も事務の方も横濱から、鈴木欽子姉が赴任されまして大助かりをいたして居ります。今は一同御殿場に於ける修養會を待ちのぞみ代表者として出席する三名の姉妹と共に會の上に祝福あらん事を祈つて居ります。

神戸女子靑年會（七月）　大呑久子

去月御報告致しました通り本月九日第一回の衛生婦人集會を開きました。當日は特別の暑さにて是れでは來會者も少なからふと案じましたが、四十餘名の熱心な會員諸姉、數名の看護婦諸氏が來會され意外の好成績でした。

講演は女醫幣原節子女史が夏期の衛生と題して避暑地撰定について又海水浴に就ての御注意があり、第二に社會衛生總動員と題して神戸市社會課長木村義吉氏が衛生思想の發達如何は國家の盛衰に多大の關係ある所宜しく社會の完全を望まば諸方面に於て各人が協力一致して衛生に注目しなければならぬと

述べられました。最後に神戸市兒童相談所長ドクトル島村育人氏は木村課長のお話を具象的の統計表、其他を以て説明され兒童の死亡に就て又食物の滋養價値等につき御講話下さいました。いづれも時代にとつて誠に有益にて來會者一同非常な滿足を以て散會されました。此會は秋に第二回を開き引つゞいて會を重ね衛生問題の研究をしたいと思つてゐます。

十二日には木犀クラブ員須磨海岸にて例會を開き美しき海の變り行く景色を眺めつゝ樂しき時を過しました。

夜學校、晝の英語の組は冬近く去らるゝミス、シルス、ミス、レルズレイ(神戸女學院音樂教師)の送別と終業の親睦を兼ねて樂しき會を開きました。面白き餘興送別歌の合唱あり記念撮影をして散會。

横濱女子青年會　横澤つぎ子

職員の異動、今回本會教育部幹事上野とし子姉本會を去り故郷新潟の父君の下に歸り、聖友女學校に教鞭を取らるゝ事に定まれり。上野姉は本會の創立時代を通じ三ヶ年の長年月會と共に苦も喜も共にされ今日本會のあるは、特に今日の教育部は姉に負ふ所少からず。去る七月八日夕姉にとりての最後の教育部文學會に引つゞき姉のため送別會を開きぬ。式上本會員及び教育部學生を代表し、ミセス、メンデルソン記念品として青年會徽章の刻まれし金時計を贈呈されぬ。姉の去らるゝを徒に悲まんよりは新潟に「會の親類」の尚一家增したるを祝ひかつ神の祝福姉と姉の働の上にあらん事を祈るなり。

教育部、第一學期は今月十五日迄なれど萬べての便宜上終業式を兼ねし文學會を七月八日午後六時半より開き、興味ある順序に從ひて時のうつるを知らざりき。なかにも、英語の子供部の歌は會衆の要求にて二度繰返へされたり劇ジャンバルジャンは女學校卒業生の組にてなされ多大の感動を會衆に與へたり。

移民部。新築講習所も此の程全くとゝのひたり、額の選擇など依賴されてミス、ベリーの御助力多大な

りき。講習にあたりて委員等の訪問もあり時にお話を乞ひしが田舎出の渡航者には特に興ある様なりき

工場訪問。近き一日程土ヶ谷の富士紡績を訪問、工場長に面會して我女子青年會の工女に對する希望を述べたり。理解と同情ある工場長は快く、我等の希望を受けられそれに對する入用品のため金員をさへ約束せられたり。工場附屬病院を訪問して弱き人々をなぐさめ喜の今更ならねど樂しきを覺えたり。

B、G、クラブ。七月一日午後六時半より夕食を共にじミス、ペリーの御話を乞ふ特に熱心もて我等に新しき決心を與へられたり。此日諸々に働ける若き會員の數人各自の働きに就て感想を述べしが正直にして語る所美しき人々の上を思ひて感慨にうたれたりミス、ドレパーの獨唱終りて會長の注意數種皆興味大なりき。

ルヰズクラブ。奉仕を目標とせる此のクラブの會員は工場病院の爲書類を集め又友なき人の訪問其他。

支那女學生クラブ。毎火曜日午後に開く十八歳より廿歳迄の三百に近き支那女學生當地に在住未彼等の爲に何の働も開始されぬ折此クラブ成立は喜ばし。

夫人クラブ。七月十三日醫學博士久賀六郎氏、横濱教育視學中川直亮先生を招き有益なる御講演を乞ふ

ペルシヤ避難民。七月十三日朝アッシリヤ避難民子供三人併せて十七名横濱驛着と聞き總係りにて我唯一の二階廣間を準備す。飢と勞れと恐にて過去三年餘を過せし此十七名の家族は見るも氣の毒の態で入來れり。我等力をこめ彼等を歡迎し喜を以て今尙其世話に怠りなし。特に優しきルヰズクラブ會員の手厚き接待に彼等は感ずべし。玩具、リボン、衣服食器は心ある人々により運ばれて彼等は昨日に變りし笑顏あらはす三年目始めて此種の日來りしよと父なる一人は子供の嬉々くを見て語れり。朝夕禮拜を共にす、言葉異れども一つ歌を歌ひ唯一の神を拜し神に於て彼等と我等の一つにせらるゝ喜を深く經驗す前途幸あれと祈りて止まじ。彼等は二週間餘を本會に送りて二十九日頃米國に向ふべし。

東京女子大學青年會報告

一月以後の役員委員の姓名。

會長 飯沼幾子　書記 太田ふさ子

副會長 岡 美佐遠　社交部長 杉森孝子

會計 鈴木千代子　共勵部長 柳原 綠

廣瀨はる子　仕事部長 西 せつ子

實行されし働き。事務會例會の外共勵部を主とす。

共勵部。講演會。石原謙先生。石幡五郎先生。

渡邊善太先生。

早天祈禱會。毎土曜日。

聖書研究會。信仰の意義研究。

社交部。新入學生歡迎會。親睦會。送別會等。

音樂部。合唱部練習。音樂禮拜。

仕事部。仕事會。學用品販賣。

來學期からは色々の新計畫が御座います。

極限の尊い完成を淺い經驗と狹い思想とで編んだ籃の中に詰め込む事は出來ません。理想が廣く目醒されて行く所には疑惑も亦數を増し質を衛めます。道は困難になつて參ります。私達は小我の頑さから大我の聲を聞き漏らす事の無い様に、自己の純潔さと人間性全體に對する深く廣やかな理解と祝福とを以て時代の推移と共に破壞される事の無い本當に永久的な家を建てるにはどうしたらい丶かを常に考へながら喜ばしく歩いて居ります。

三年の間色々の道を歩いて來ました。未だ自己を萎縮から全く解放し得ない爲にともすれば道草をしたり、小さい自己の賢さと自己の利益との爲に倅い靈の喜を後廻しにしたりする人も一人二人はありませうけれど、目覺めた者達は餘りに道の廣さに驚きながら力強い友の聲と友の祈と自分の叫との結合に爽やかな力を得ながらどん／＼と進んで居ります。今に皆の衷心の必然性がむく／＼と起き上つて來て前の者達の取り殘した物を拾ひ仕損じた所を繕つて堂々と前進する日の到る事を待ち望んで一入に力づけられて居ります。

私達は熱を持つてます。そして出來る丈け愼重にと希つて居ります。純潔さと熱誠とは眞理を得させずにはおきますまい。そして之を行ふ事を許すでせう。只私達から高慢と怠惰と偏見とを取り去つて本當に永劫の櫓に立たせて下さいませ。醜さ心暗さと偏狹さとは主を愛する者を害ひます。

茲に私達は更に一層の努力を誓ふ事を躊躇致しません。同時に青年會本部始め總ての美しい事業が常に其精神に生きて限りなく榮えて行く爲に眞の祝福の裕かなれと祈る次第で御座います。

仙臺市尚絅女學校青年會報告

暑さ烈しくなりました。本部の皆様お變りは御座いませんか。私共の會も小さいながらお蔭様で働いて居ります。四月來の仕事の概略お知らせ致します

一、仕事日に雑布、ハンカチーフ、運動帽、及びお菓子等をつくつて學校の先生や生徒に賣りました。

一、仙臺キリスト教婦人會主催のバザー（育兒院のため）に加はつて働きました。

一、尚絅日曜學校の花の會のため花賣を致しました

一、キリスト教青年會主催の活動寫眞。（クリスタス、赤熱の十字架）の爲にコーラスをいたしました。

一、六月二十六日(花の日)午後、廣瀬川にてミスター、ロッスによつて六人の姉妹方がバプテスマをうけられました。神の恵とほんとによろこんで居ります。

"No cross, no crown."
「十字架なければ王冠なし。」
"Chances once lost never come again."
「機一度逸すれば復來らず。」
"Pardon another often, thyself never."
「他人は屢々赦せ而して自己は決して赦すな」

友の音信

○

ロンドン　會友

其後は御無沙汰申し上まして恐入ります。女子靑年界の會報でいつも御忙しく人の爲に御活動遊すのを拜見してつく〲日本に先生を持つて居る事は殊に日本婦人の誇であると同時につよみとありがたく存じて居ります。次に私もお蔭樣で元氣に過して居ますから御安心下さいまし。永く住みなれましたイングルウードにも主人がロンドン支店づめになりました爲に御別れして一ケ月前に一家ひきうつりました。米國で心からの親切をあびせかけて下さつたミセススピーアをはじめ澤山の友達と御別れいたしますのは誠に辛ふ御座いました。而しそれ等の方の御親切のつゞきでこちらの世界女子靑年會長や其他社會事業につくされて居られる新しい思想の方々に紹介して下さいましたので英國の精神的方面や社會事業につきまして學ぶ事が出來ませうと樂しみにいたして居ます。何の幸か、世界の都から都とうつります事はたゞ生活を面白く樂しく浮れて過してはほんとうにもつたいない事で何か神樣がこのつたないものにも世間を見せて御思し召しのあるところに氣がつき御役に立つやうにとかく迄惠まれるのではないかしらとつく〲考へさせられます。滯米中は日本人としてまた神の子として自分の出來るだけはつくしたつもりで御座います。而し落度の多い私には外の方の半分も出來ません。たゞ見えぬところに見給ふ神は少なくとも自分を殺してたゞに日本の爲とも思はず人の爲に正しいと信じた事をするやうにつとめました事を御覽下さつた事と信じて居ります。日本へかへります前に出來るだけ英國のよい方面を見まして歸朝の曉には十分な御役にはたちますまいが何か私の力相當な御用をさせていたゞけましたらと今から樂しみにいたして居ります。

○

天津　會友

獻金に就てはアナニヤをつゝしみ又シモン（使徒

八ノ廿)の如く「神の賜物を金にて得んと意ふ」事なき樣私のため仲保の御祈を願ひます先生達に收入の使用に道を教へらるゝ事を此上なく感謝してゐます眞に初穗の意義にかなつて全體の聖められ全く獻身なし得ん事を祈つてゐます、今度増給を受けましたから先づ第一に私は之を御會に送つて其祝福を受けたいと存じます。

其一　　　仙臺　小さき星

われ敬虔なりし日は
わが日はよろこびにあふれ
望にかゞやきたれど。

われいつしかにプラウドになりぬ
あゝ我日々に悲しみの影さし
わが生活は我望を消しぬ。

いかにしてかとりかへさまし
わが敬虔なりし心
我身を去りゆきし望の光。

神よ我一切をすてさせ給へ
空しき榮の夢よりさめて
生れしまゝに生かしめ給へ。

其二

「我神わが神何ぞわれを捨て給ひしや
いかなれば遠くはなれて我を救はず
わがなげきの聲を聞き給はざるか」
かくなげきしいにしへの詩人よ
あゝ汝が歎きはわが靈のなげきなり
我のみは汝の聖顏をさけ
御聲より遠くはなれぬ。
わがたましひは御顏を待のぞめども
あゝわが罪はわれをはなれず
「エホバよ、遠くはなれて居り給ふなかれ
わが力よとく來りてわれをたすけ給へ」

○　こ　ふ　み

暑い〳〵とこぼしてゐらつしやいますか。

暑も知らぬ仙境に遊んでゐらつしやいますか。

故郷に、海に、山にのび〳〵とした單純生活をしてゐらつしやることゝ存じます。此八月をどんなに暮すかと言ふことは秋よりの生活に、大な影響を與へます。何卒誌友の皆様神の殿なる身體を御健全に御强壯に遊して、秋の活動の精力をお蓄へ下さいまし。特に學生の方々の夏のよいお仕事は御近所の、小供達か或は御親類の子供方をお集め遊して、歌を敎へたり、可愛いお話をして聞かせ知らず〳〵の間に小さい人の心の中に神の國の種をお播き遊したらんにはどんなに御幸福でせう。思はぬ時に芽を生やし、それなくては開かなかつた美しい人格の花を咲かせる動機を與へ得られたならば何と申す祝福でせう。今左に横濱共立女學校の宮崎ふじ子様の昨夏の御實驗談を御參考の一はしに掲げませう。

「私を取り巻いて一心に聞いてゐる子供達が「先生顔から又汗が落ちる」と囁いてゐるのも氣づかずに縫取りの順序の説明をして厚紙をくばり今日の仕事を始めた。少しすると先生糸がきれました、針が折れましたと持つて來るのを一々見てやる。なほしてやる、やつと出來上つた時の嬉しさうな子供の顔を見た時私の心の喜びはどんなであつたゞらふ。子供達を門まで送つた私は左のプログラムに從つて明日の準備に取りかゝつた。午前七時半開校、祈、讃美歌、衛生の話、讃美歌、聖書の話、次にお仕事、こうして午前中の二、三時間を可愛い無邪氣な子供達のため盡し得る身の幸ひを感謝し祈らずにはゐられない、良い樹に良き實を結ぶとの御言葉のやうに祈を以て開かれた此小さい田舎の夏期學校が少しなりとも神の御國の筆を現したかと思ふとき初めて味つた辛しい事や骨折も感謝の涙で清められ洗はれた。其二三を擧ぐれば子供が毎日衛生の話を聽いてから身のまはりを清潔にするやうになり、行儀が良くなつた第二は日曜學校が隆盛になつた、第三は是等の子供によつて未信者の家庭と親しくなりよい傳道の道の開かれた事である。」

消息

□ミス、ダニング東京女子青年會幹事。同氏は七月六日新渡戸氏宅にてミスター、ジャーマンと結婚式を擧げられ直に箱根に新婚旅行に向はる。ミスタージーマンは東京在住外國人の牧師として秋より東京青山に居を定めらるべし。

□堀順子氏。留學の爲七月廿九日シャトルに向けて鹿島丸にて出帆せらる。同氏は八月中はシーベック夏季修養會にのぞみ九月をイリノエ州の一市の女子青年會に過し秋よりミズラー大學に留學さるべし。

□上野俊子氏。横濱女子青年會今日の發展に預りて大なる功績ある同氏は今回青年會を辭され秋よりは新潟市樂友女學校に教鞭を取らるゝこととなりたりいづこに於ても必らず從來にまさりたる良成績を擧らるゝことを疑はず。

□ミス、カフマン。一ケ年餘カナダに歸省中なりし同氏は七月四日再東京に歸られ秋よりは、東京女子青年會に活動せらる。

□松岡鎮枝夫人。中央委員會計の同氏は七月上旬御自宅に本部日本人幹事一同を招待され堀氏米國行、淺井治子氏の大阪赴任の前祝を催されたり。

□永井せら氏。サンフランシスコ女子青年會幹事の同氏は七月廿六日草間志享氏と御結婚の報來る。

□加納たつ子夫人。紐育に永年御在住なりしが今回御良人御轉任にてロンドンに御住居の報を得たり。

□志田くわ氏。久々にて御兩親御訪問なりしが七月十九日コレヤ丸にて再ハワイに歸らる。

□高倉徳郎氏。八月上旬スコットランド神學校に御游學の爲御出帆なり。

□フォーステック博士。靈交錄、耶蘇の人格其他の著述にて日本人學生間にも知られたる同博士は今回支那に行かるゝ途次日本に立寄られ、東京幹事宅、京都幹事宅等にては同夫妻を招待したり。同氏夫人は米國女子青年會中央委員の一員として有力なる婦なり。八月下旬支那よりの歸途輕井澤にて講演ある

よし。

□木下美津枝氏。今春第一高女を御卒業になりし、ハーベストクラブ會員の同氏は七月三日仙臺の教會にて受洗されたり。

□松宮たま子氏。東京靑年會の會員なる同氏は昨年得給ひし愛子誠様を六月廿六日失はる。

□林房子氏。同氏は多年旅行者の友の爲にお働き下されしが今回御辭職郷里北海道へ御歸國。

エスペラント(國際語)に就て

何先生のお話の一部を餘白のある丈書きませう。

「我々は言葉がよく通じない處から誤解が生じ又、對等の交際がむづかしくなる。如何に語學の達者のものと雖も外國語を以て外國人に接する時多少のひけをとる、若し又眞に自國語と同じ丈に話せる人がありとするならばそんな人は外交をまかせ兼ねる人である。故に國際關係上用ゆる言語は、國際補助語即世界共通なるものたるを要す。今後の人間は自國語と、國際補助語とを知ればよい。外國語は靑年にとつて一種の重荷であるが、此の國際語エスペラント(希望しつゝある意)即ポーランド人ザーメンホーフにより案出されたる語は直に記憶られる。レオトルストイは、二時間にしておぼえた、或者は二日で或は四日で書物を讀み得るに至る。私は一年半にて他語の十數年にまさる研究をなし得た。人類最後の幸福は平和にしてこれを得んが爲には此語が必要なのである。對等の立場に立つて吾々が話す時眞の理解を得底徹せる相互了解を得かくて世界の人々は凡て對等に交り得るに至る。

天國を地上に來らす爲に
凡ての感情をいづれの語よりも最もよく言ひ現し得る故に
伊太利語にも勝りて歌に適す故に

自己の完成と向上とをせん爲にいよ〳〵盛となり、商業協議所、國際定期市場に漸次普及、今は萬國エスペラント協會ありて世界各國の通信に應じて居る。」

編輯室より

□七月の六日から同十二日迄午前八時より九時半迄六日間何先生を聘してエスペラント講習會を本部の二階で開きました。十三四名の方が出席されました。渡邊さんはなか〳〵御熱心で晝食の時などエスペラントをよくお使ひになります。

□本部の幹事どもは西洋人は輕井澤、日光、箱根などに、日本人は或者は故郷に或者は海に參ります。しかしお手紙は事務所へ御送り下さいますれば留守の者から廻送することになつて居ます。九月の八日から始まる御殿場の幹事會で一同相會し秋の仕事を開始します。

□先日京都でフォスデック博士が日本人は科學文明外的文明をとり入れるに餘りに急であつた爲内的に一大缺陷がある。神の力聖靈の力を受けキリストより來る生命を獲得するにあらずば眞の文化の華を開き得ぬと言ふ意を語られたと言ふことですが眞によく鑿ち得た言です。今の時代に最も必要なものは生ける宗敎の傳播です。會友の姉妹達御互に相助けて此一つの目的の爲に奮勵しませう。

□會友の御投稿を歡迎します。〆切日毎月十五日。

（小文）

摘要

△本誌代金は總て前金にて御拂込被下度　前金切れの捺印有之候節は直に御拂込被下度候

△御送金は振替にて拂込まるゝ方便利にて凡間違も無之候、但手數料壹錢を御加へ下され度候。

△振替、東京、貳參七貳參番

「女子青年界」定價及廣告料

定價郵稅共	內地	海外
一部	金十五錢	金拾七錢
一年前金	壹圓五十錢	金壹圓八拾錢

廣告料	一回掲載
一行	金五拾錢
四分一頁	金五圓
半頁	九圓
全頁	金拾五圓

年極又は回數により割引有

大正十年七月廿八日印刷納本
大正十年八月一日發行

發行所　神田區錦町一丁目十六番地　日本基督敎女子青年會
電話 神田三六五二番　振替東京二三七二三番

神田區錦町一丁目十六番地
發行兼編輯人　河井道子

芝區三田四國町七番地
印刷人　前川吉次郎

印刷所　右同所　三成舍

girls were discovered who wanted such an opportunity. One of the schoolteachers was giving them lessons in her own home but was unable to keep it up. Ichioka is too far from us for the girls to come here, so arrangements were made for us to go to them. Miss Matsumoto has been the chief dependence for this work, doing both individual and class work with the girls.

KOBE

The closing exercises of the morning and evening English schools were held on July 8th, as farewells for Miss Sills, and, in the evening, for Miss Illsley of Kobe College who has taught in the night school. Miss Onomi interpreted the occasion in her beautiful way, bringing out the spiritual kinship that we have felt as we have been together, and earnes of the fact that there if but one Father, and one Family, all over the world.

Miss Sills herself made marvelous speeches in Japanese, using her entire vocabulary. The first and second year girls distinguished themselves in an English play, representing the departure of Miss Sills from Kobe Station (achieving a very living and moving train) and her arrival in China, the awful Chinese language, and her conquest of the affections of the girls of the China Y. W. C. A. Miss Watanabe, the educational secretary, contributed original farewell songs,—and there were others who shared in the spontaneous expressinn of love and humor which reflected the radiant spirit that had prompted it. "Mata irasshai" was they key-word.

The Kumochi Neighborhood Club had its second meeting on July 6th, in which ten women participated in a free discussion on the care of children, and a growing sense of fellowship. Mrs. Isobe, the leader, is fine.

The Gotemba Summer Conference Fund, collected in an old post box hung at the entrance to the Building, and used as a mitebox for anonymous contributions, grew too large for the number of delegates who could be sent from Kobe. The Mokusei, Princess, and Friendship Clubs have each elected their representatives, while the fate of others who wish to pay their own expenses still hangs in the balance. We are ooping that most of them can be admitted.

The tentative appointment of Miss Yamamoto as Public Health Nurse, made at the June Board meeting, was so sucessful, judging by her first month's work, as to be made permanent at the July meeting. Miss Yamamoto will be left in charge of the Association during August, and will give health talks to the emigrants in the institutes, which have no vacation, supplementing the work of Mr. Kuniyoshi, who has recently been brought from the Pacific Coast to be the Kencho teacher in the emigrant educational work.

On July 9th a meeting is being held to which nurses especially, and the Association membership, are invited, addressed by Mr. Kimura, City Social Service Department Head, on Mobilization for Health. Other speakers are Dr. Shimamura, Child Specialist for the same department, and Dr. Shidehara as a representative of the women physicians.

The Kobe Associatien is looking forward to substantial additions to its staff in the fall. Miss Grace Macgregor will come for second year lauguage study and to have charge of the Foreign secretaries' house. Miss Jean Chappel, who arrived on the Empress on July 4th, will take the place of Sills and also, as she is a Domestic Science department (1921) graduate of Toronto University, be a boon to the popular sewing and cooking classes. (Miss Chappel was born in Japan and knows the language.) And if her plans permit, we are also hoping to have Miss Tatsumi Takahashi, who will come with fine preparation and experience to do the much needed work of religious department secretary.

feeling of the whole Association when she thanked her and wished her happiness and joy in her new work. Mrs. Mendelson presented her with a gold watch from the Board and from the girls in the Association. There were also other gifts and expressions of friendship.

The Business Girls' Club by individual subscription and by a vote from the treasury sent more than thirteen yen to the students of middle Europe. These are girls who are attending night school to piece out their meager education themselves. The last meeting was an intensely interesting one, consisting of a talk by Miss Verry upon developing ourselves in four directions, and then talks. prepared beforehand, from girls who worked in a newspaper office, an exporting office, a minister's office, a silk inspection house, a foreign firm, respectively. Then followed a talk from the able president on personal care of the dress! The girls enjoyed every minute or it all.

We have had a very satisfactory interview with the manager of the Fuji Boseki, when he showed us that he was willing to cooperate with us, in our plans, and would grant us the money we wanted for equipment. We also visited twice the factory hospital; talked individually with some of the girls, and left some magazines and flowers. The Louise Club has voted to send magazines and books to the hospital there.

The Chinese Girls' Club has been meeting regularly and has secured many new members. We have ascertained that there are nearly 300 girls between the ages of 18-20 in Yokohama's Chinatown, and that practically nothing is done for them.

This month at the Residence has been a crowded one, with all the rooms in use constantly. One girls has been seriously ill, and is now in the Yokohama Hospital.

Most of the secretaries will have their vacations in August, but Yasuda San will be in the building all of the month of August. Last summer we were abie to be of great assistance during the summer to the community, and we will be ready for anything that needs us.

The Board of Direcrors are rejoiced over the action of the Secretarial Committee of the National Committee, appointing Miss Allen to the staff of the Yokohama Association.

OSAKA

Wednesday evening, June 29, we realized a long-talked-of plan, having an Exhibition, Bungakukwai of all our Educational Department work. The Sewing Class had various garments on display, chiefly children's underwear, aprons and dresses. An aftermath of this class appears in an enthusiasm for foreign dresses. Our secretaries and older Association girls have been busily sewing of late, liking the simple, one-piece foreign dresses for the hot, midsummer days. A full Exhibition program was given of recitations, dialogues and music. The language work was chiefly English, with one recitation of literary Japanese representing the class in "kokugo" (Japanese language). The girls had developed some good action as they practiced and overcame many difficulties of English, so that on the Exhibition night they quite outdid themselves. The Cooking Class had made scores of delicious friedcakes which were served with coffee while we enjoyed some musical numbers. The evening closed with a remarkably good tableau of Millet's Angelus, the picture so much loved by our Japanese girls. A hidden chorus sang the evening hymn, "Heavenly Father, Holy Lord," during the tableau. The attendance was smaller than we hoped for as the night proved very rainy, but fully 75 came and were very appreciative. Kono San made a statement about the Student Relief effort, saying that the Association would be glad to receive contributions. No special strees was put on the matter, but people seemed glad to give and up to date Yen 75.00 have been received.

Several nightschool classes will continue through the summer, at the Association building and also at Ichioka, where a new center seems to have started itself. Through announcements of our educational work in an Ichioka school a number of

BUSINESS GIRLS DEPARTMENT.—June 21st and 22nd three of our business girls' clubs, "Duyo," "Yusen" and "Bluebird," united in sponsoring two victrola concerts, the proceeds from which, amounting to Yen 115.00, will be used to send four of their members to summer conference, with something left in each treasury.

On June 29th a preliminary meeting looking to the organization of a Business Women's Club was held, attended by representative business and professional women. Miss Lacy spoke on "The business woman of today, her opportunities and responsibilities," and of what was being accomplished by business and professional women's clubs in America. Considerable interest was shown, and they voted to meet together again on July 16th to discuss the matter further, with time for a social gathering at the close of the meeting so that they might become better acquainted.

On July 9th there was a party given to the girls from the Kangyo Bank, which employs more than three hundred girls. To our delight one hundred and twenty girls came. We first had supper together, followed by a program of music and aesthetic dances by the gymnasium girls, after which everyone joined in recreation. Miss Shidachi, the daugher of our President, who has recently returned from England, gave the girls a most enterining talk. We think this party will mean many new members for the Bluebird Cluq, which is recruited from this Bank.

On July 11th Mrs. Suzuki, Misses Muira, Satome and Ogimuira went to the Fuji Boseki spinning factory at Kawasaki to give recreation to the little factory girls on their rest day. About seventy participated in the games, and the Association girls were invited to supper and entertained by the factory girls afterwards, where they all had a most happy time together. (It may be of interest to note here that the Association girls were able to do this from their training this spring in the Leaders' Gymnasium Class).

Jully 11th, 12th and 11th Miss Sakamoto conducted a short cooking class course for business girls. Fourteen girls registered for the classes and were very much interested and pleased with what they learned.

KAMAKURA COTTAGE.—June 25th seven members of the Athletic Club spent an enjoyable week-end at tde summer cottage; and on July 9th six of the Fuyo Club members went down for the week-end.

DOMESTIC SCIENCE DEPARTMENT.—On June 24th there was a splendid cooking demonstration to which all Association members and their friends were invited.

The afternoon of June 28th there was a closing party to the members of the cooking classes, morning English and Typewriting classes. There were seventy or eighty girls present and the gymnasium rang with their merriment as they played games together.

EDUCATIONAL DEPARTMENT.—The English Speaking Society met on June 40th, at which Miss McGregor gave a very interesting talk on her work in France, touching on the part played by women in the Great War.

On July 16th the members of the various English classee united in giving an English entertainment, including two short one act plays and recitations, after which refreshments were served,—and then, with vacation anticipations and farewells for the summmer ended a friendly year together.

YOKOHAMA

The Educational Department closed its work on July 8th with an entertainment or exhibit of the work. The most interesting features were the songs by the children's class, and the presentation of a scene from Les Miserables by the girls in the advanced English class. This exhibit closed the year's work, which has been so ably and faithfully carried out by Ueno San. It is with the deepest regret that we bid farewell to her as she goes to take up the work in her home town,—work that she has for long thought was the thing that God wanted her to do. What the Yokohama Association owes to Ueno San for her loyal and unselfish devotion through hard times, is not to be estimated. After the English exercises, Mrs. Murahara voiced the

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

VOLUME XVIII AUGUST, 1921 NUMBER 8

NATIONAL

Miss Nobu Hori, national Japanese office secretary, will leave for America on the "Kashima" July 29. She will go to the Seabeck Conference and from there to the University of Michigan at Ann Arbor, for two years' study, before she enters National Training School in New York. She expects to be away from Japan three years.

Summer Conference will open July 28th at Gotemba, and will last for one week. Only a few girls can be taken care of, compared with the number who wish to come. The grounds accomodate only about 150 people, and this means space for about 180 girls. Perhaps next summer we may have our own conference grounds, where we can accommodate all the girls who so long to attend conference.

TOKYO

The Tokyo Association has been a perfect buzz of activity during the past month, with many events following each other in rapid succession, but we have chosen July 4th as a good beginning, because it marks an event to which the whole Association has been looking forward most eagerly all the spring,—namely, Miss Kaufman's arrival in Japan after more than a year's furlough in Canada. We know that the whole Association in Japan rejoices with us in her return, and we are more happy than we can express to have her back again.

Very important events hung upon Miss Kaufman's arrival,—for she brought the wedding dress and veil which two days later transformed Miss Dunning into a very lovely bride, Mr. P.P.W. Ziemann, who has recently accepted the pastorate of the Union Church of Tokyo, being the groom. The wedding took place at 5 P. M. on July 6th, at the National Residence, which lent itself most ideally to a wedding setting, with the large front-room alcove a veritable bower of greens and pink gladioli. Miss Ferris, in apricot-colored georgette, with flowers to match, acted as Maid of Honor; Miss Kaufman, in lavendar, carrying orchids to match, entered with the bride and "gave her away"; while little Miss Theodosia Phelps was flower girl; Mr. Smith, of Sendai, being best man to the groom.

Miss Dunning's marriage means a great loss to the Tokyo Association, with which she has been actively connected for the past two years, following a year of language study,—first as Student Secretary and for the past year as General Secretary in Miss Kaufman's absence.

On July 2nd the Tokyo Association and the National staff united in a concert given at the Kanada Y.M.C.A., the proceeds from which were divided between European student relief and Tokyo Association. Mrs. Ono, violinist, Mr. Alexandroff, pianist, and Mr. O'Lange, soloist, who rendered the first half of the program, were most appreciated, and the building resounded again with enthusiastic applause, in response to their truly artistic performance. For the second half of the program there was a minstrel chorus of Americans who sang Negro folk songs, and old southern plantation melodies, the men were most amusing to the audience with their blackened faces and comical clothes; there were three aesthetic dances by the Tokyo gymnasium girls; a short one-act farce by two Japanese girls; and the whole program was most effectively closed with two aesthetic dances by Miss Ferris.

There were two performances which were all attended, and though the returns are incomplete at this time, we believe the net proceeds will amount to about Yen 2,[illegible].